

# 芥川だより

発行日\*\*\*2016年9月1日 e-mail:akutagawa\_dayori@yahoo.co.jp  
最新号から創刊号まで閲覧できます。 http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/

編集発行人 下村嘉明

発行所

☆ 着物から服へ

着物から服を仕立てます

高槻市芥川町2 -1 4 -3

TEL072-681-8870



\*\*\*\*\* 一部100円です \*\*\*\*\*

## 田の草取り



春に植えたひよろひよろした小さな苗も盆頃になると大きな株になる。太陽がギラギラと輝く昼下がり、昼寝を終えた母に「ヨシよ、ちょっとだけ手伝うてくれや」とせがまれる。涼しい朝方は、学校の宿題をしていたが、いつものようにやる気が起きない。勉強と言っては手伝いを避けていた自分も勉強にも嫌気がさしていたので「ほんなら、手伝うてやるわ」ともったいぶって短パンに着替える。軒先にかけてある麦わら帽子をかぶり、サンダルをひっかけ家を出た。

盆が過ぎれば少しは暑さも和らぐというが、素足で田に入り、四つん這いになって草取りをするとムツとした空気に包まれる。大きくなった稲の葉が体につかえると少しばかり痛い、むせるような空気が漂う稲の株の間に生えた雑草を引き抜いては泥の中に突っ込む。ヒエやアワは引き抜いて畦まで運ぶ。種が落ちると増えてしまうからである。

中腰で田をなでるようにして水草取りをすると、すぐに腰が疲れてきて休みたくなる。母も近くでやっているから、仕方なく辛抱してつづける。素足で田の泥を踏むとぬるっとした妙な感触である。田の中にはいろいろな生き物がいる。カエルやイモリなどである。なかでもタガメは噛みつかれそうで嫌だったが、腹が赤いイモリはもっと触りたくなかった。イモリの匂いがなんとも臭いからである。カエルの匂いとちがうイモリが発する独特の匂いと腹の赤とが私にトラウマのようにイモリを嫌いにさせていた。

昔から百姓は夏に田の草取りをしてきたのだ。雑草との戦いは終わりが無い。取っても取っても、また生えてくる。ほかしておけば田は草だらけになり稗やアワが稲穂のように大きくなって、次の年にはもっと増えてしまうのである。除草剤は家にもあったのだが、あまり使おうとはしなかった。毒性の強い除草剤の怖さを知っていたからだ。今頃の田んぼは、草が生えていない。草取りをしている人も見かけなくなった。もう、過去の風景になってしまった。除草剤が効いているからにちがいない。

## 死をめぐるあれやこれ(24)

石川 吾郎

### カネタタキの家

夏も終わりに近づき、少し涼風が吹き始める夕まぐれ、我が家のささやかな庭の草むらから、チンチンとカネタタキ鳴き声が聞こえてくる。それを聞きながら、娘が「カネタタキがうちの庭に代々住み着いてるね」と言った。そういえば十年ばかり、毎年夏も終わり近くなると、このか細い虫の鳴き声を聞いている気がする。虫の命は一年ないので、庭の草むらで毎年繁殖をしているのだろう。

このか細い虫の音を聞くと、私はたちまち幼い頃の世界へともどっていく。子どものころ岐阜の実家の縁側で、線香花火をしたり、みんなでスイカを食べたりして、ようやく蚊帳の中、寝ごぞを敷いた布団の上で寝ようとして、母が電灯を消すと、庭の草むらからこのカネタタキの鳴き声が聞こえてきたものだ。

しばし私たちは、草むらからの鳴き声に耳を傾け、やがて深い眠りに入っていく。自分の子どもたちもこのような思い出をもつことができているだろうか・・・。

今や実家はまだあるものの、母と父はすでに亡く、カネタタキの声も聞くことはできない。

さて、か細い声のカネタタキは、いつまで我が家の庭で鳴いてくれるのだろうか。

## みんなで知ろう日本の危機 (13)

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム	石川吾郎	1
マスコミが伝えないニュースの側面	伊藤明	2
素老人☆よもた帳 (30)	坂本一光	8
哲豆屋のつぶやき (26)	祖藏哲	10
大峰奥駈道 (4)	梵店主	16
おっちょこちょいぼけ (41)	A O	16
父のシベリア俘虜記 (5)	若山哲郎	12
大人の今昔物語 (26)	石川吾郎	15
孫ウオッチング (9)	福田圭	14
B級サラリーマン渡世譚 (38)	明石幸次郎	16
編集後記		25
女90年の軌跡	眞糰	26
俳句	土田裕	26

## マスコミが伝えないニュースの側面

伊藤 明

TPPの国会批准を許すな！

明らかにしたTPPの実態

## ■はつぎ

オリンピックと高校野球の熱狂の夏が終わりました。七月の参院選挙からまだ二月ほどしか経っていないのに、もう遙か遠くのできごとであったように錯覚します。これはマスコミが毎日メダルの数や選手たちのエピソードといったことを

流し続け、国民の関心を政治から逸らしていたことによると思われまます。しかし今回の参院選挙の結果、改憲勢力が国会の三分の二を占めたという事実は、この秋からの政治の大きな流れを決定づけてしまうこととなります。それほど七月の国政選挙の意味は大きなものでした。

国費で特別機を使いブラジルまで出掛け、オリンピックの閉会式での得意満面な愚かしいパフォーマンスを終えて、安倍氏はこの秋の国会での課題としてTPPの批准を進めると述べています。そして改憲への動きを活発化するはずですが、また自民党総裁の任期延長をして、東京オリンピックを首相として迎える決意を見せています。これは一九三六年のベルリンオリンピックのヒトラーを思い起こさせると感じるのではありませんでしょうか（おそらくこの人物は、こういった目立ちたがりのパフォーマンスに至上の満足を感じるのでしょう）。まさにこの点でも安倍政権は「ナチスドイツに学んで」いるのです。

そして前号のこの記事でご紹介した★「私は国民の生活のための政治なんて間違っていると思います」★「国民は天皇陛下の国を護るためには、血を流す覚悟をしなければなりません。選挙権はそういう人に見与えるべき」★「戦争は人間の霊魂進化にとって最高の宗教的行事。これがずっと自分の生き方の根本」などと、病的とも思える不気味な（オ）

カルト発言を繰り返している稲田朋美

「防衛大臣」が、自衛隊の「駆けつけ警護」の訓練を始めると発表しました。憲

法違反の安保法制に沿った「駆けつけ警護」が実行されれば、派遣された自衛隊

員は、直接日本を攻撃するわけではない

「敵」を殺すという場合も出てくるでし

ようし、その「敵」から「血を流して」

殺害される危険性がぐんと高まることにな

ります。実際に自衛隊の派遣地には棺

桶も送られていると伝えられていますの

で、万一自衛隊員の犠牲者が出れば、安

倍政権はそれを「英雄」ないし「英霊」

として靖国神社に祀るといったことをし

て、国民の病的な「愛国心」をあおり、

直接日本に敵対するわけではない「敵」

に対する憎悪を増幅するのではないかと

想像させます。マスコミもそれに対して

批判もせず同調するといった事態が容易

に予測できます。自衛隊員の犠牲者がで

れば、安倍政権とその背後で政権を操る

「日本会議」にとって、それは緊急事態

条項を盛り込む改憲の動きに弾みをつけ、

「戦前の日本への回帰」をめざすための

千載一遇のチャンスだと認識されている

だろうと推測できるのです。これは容易

に想像できるシナリオです。

尚、ナチスが民主的なワイマール憲法

の下で合法的に台頭してきた過程につい

ては、本紙第一一一号（本年四月号）で

取り上げていますので、ぜひ今一度お読

みください。

## ■TPPの国会批准を許してはいけない

今回は、再びTPPについて取り上げ

ようと思えます。安倍氏はこの秋の政治

課題として、まずTPPの国会批准を挙

げました。なぜこうまでTPPにこだわ

るのでしょうか。TPPは米国か日本の

いずれかが批准しなければ成立をしま

せん。しかも米国の大統領選挙では、共和

党のトランプはTPPに反対し、民主

党のクリントンも再交渉を主張しています。

それなのに安倍氏がこうまでTPPの批

准にこだわり急ぐ背景には、日本に進出

を狙う米国の巨大企業の利益代表からの

強力な圧力があるものと考えられます。

TPPこそが、アメリカと日本の一部の

富裕層たちが、さらに富を自分たちに最

も効率的に取り込むための仕組みそのも

のなのです。これは国としての主権を侵

犯し、格差を拡大し、九九%の国民を貧

困と悲惨に陥れるものです（これは日本

国民だけではありません。米国民にも言

えます）。そしてTPPは憲法違反の条約

です。「核兵器廃絶」を唱えるオバマ大統

領は、任期の末期に至っても、TPPの

推進に躍起になっています。彼は「チェ

ンジ」を掲げた八年前の登場の時とはう

って変わって、すでにウォール街のグロ

ーバル大企業の使い走りになり果ててし

まっているのです。

今回TPPに反対して、その危険性を

告発する団体と個人からなる「TPPテ

キスト分析チーム」から、TPPの正確

な情報をわかりやすく伝える、非常に優れたパンフレットが出ていますので、これをご紹介しましょう。マスコミで正確な情報が伝えられることがほとんどありませんので、これは非常に貴重なパンフレットです。これを読むと、TPPがどれほど私たちの生活に広く深く影響を与えて、国民の生活を破壊していくものかわかります。

ここでは二四項目のQ&Aの枠をそのまま借りて、私見を交えつつ、ごく簡単にこの内容をご紹介します。できればぜひ実物に当たっていただきたいと思えます。ネットで「TPPテキスト分析チーム」と検索すると、これをダウンロードできるページに行けます。詳しくは記事の終わりを参照してください（なお本紙でもこれまでに第一〇二号、一〇三号などでTPPを扱っておりますので、参考にしてください）。

### ■TPP 二四のギョク

#### ◆Q1: TPPについて結局誰のためのルールなの？

A: 大企業と富裕層1%がさらなる富を得るためのルールです。

今世界では、上位10%の富裕層が世界の富の90%を所有しています。日本でも、貧困率は六人に一人、ひとり親など大人が一人の世帯に限れば貧困率は五五%で、先進国で最悪の水準です。富裕層がより豊かになれば、いずれ貧困層にも富のおこぼれがあると「トリクル

ダウン」は起こらず、行き過ぎた市場原理主義や自由貿易推進こそが、世界の貧困・格差を生み出す原因であることが実証されています。これはグローバル経済の推進者の経済協力開発機構(OECD)や世界銀行、自由貿易を唱える経済学者たちも認めていることです。TPPはこうした負の教訓を無視し、一部の富裕層や大企業・投資家にとって有利なルールをさらに進めようとするものです。交渉や協定文作成を担当するのは米国の大企業から政府交渉官に「転職」した人物、例えば米通商代表部のトップであるフロマン氏は大手銀行の出身です。

TPPの他にも、現在世界ではこれに似た貿易交渉が進められています。米国とEUの間のTTIP（環大西洋貿易投資パートナーシップ）や日本、米国、EUなど五〇か国からなるTISA（新サービス貿易協定）などです。これらはいずれもISDS条項が含まれ、秘密交渉である点などTPPと共通しており、参加国の市民社会からは貧困と格差を助長し、人権や環境に悪影響を及ぼすと強く批判されています。

【注】TTIPは、米国とEUの間のTPP類似物。この危険性を知って、EU各国の住民は、何十万人にも及ぶ反対集会をたびたび開いて、反対運動を展開しています。

【注】TISAは「公共サービス」をすべて民営化するというもので、住民の健康

や環境に悪影響が出ても、その国の政府はその企業の責任を追究したり事業を法律で規制する権利を一切もてないという代物。今後すべてのルールはこの協定によつて作られる超国家組織によつて決められることになる。「主権国家を一掃する最終仕上げ」とも言われます。

#### ◆Q1: 自由貿易は自由とはなにか？

A: 「自由」ではなく、強者によつて「管理」された貿易です。

ノーベル経済学賞を受賞したアメリカの著名な経済学者のステイグリッツ氏は、「TPPは特定集団のために『管理』された貿易協定だ」と述べています。ステイグリッツ氏はまた「協定のそれぞれの条項の背後には、その条項をプッシュしている企業がある。米通商代表部が代弁しているのはそういう米国のグローバル企業のためであり、アメリカ国民の利益のためではありません。ましてや日本人の利益のことはまったく念頭にありません。『規制を取り払え』という考え方はじつにばかばかしい。問うべきは『どんな規制が良い規制なのか』ということのほうなのです」とも指摘しています。

ステイグリッツ氏は今年三月に来日し、首相官邸で日本の経済政策について意見を述べています。その際、消費税増税への反対だけが報道されましたが、来日講演の大半がTPP批判であったことは報道されず意図的に隠されていました。

#### ◆Q11: ISDS条項について何が問題なの？

A: 企業や投資家から訴えられ、国の主権や人権が奪われます。

ISDSとは「投資家対国家、紛争解決」の略で、投資家が相手国の協定違反によつて損害を受けたときに、仲裁申立てを行い、損害賠償を求めることができる制度です。わかりやすくいえば外国の企業が相手の国の法律による規制によつて自分の儲けが妨害されたとき、相手国の政府を訴えられるもの。これは公的な裁判所ではなく、世界銀行の傘下の圧力的に米国に有利な状況で仲裁されます（これまでのほとんどの例が米国側の勝利になっています）。

しかもTPPは、驚くべきことに日本では国内の法律よりも上に来る、つまりわが国の国民が民主的な手続きで国会決定をした法律がTPPにより強制的に変更させられてしまうという、とんでもない代物なのです。一方米国側ではTPPより国内法が上であり、強制的に法律が変えられることはありません。つまりTPPは明治初期に締結された条約のような、**不平等条約**なのです。当然これはわが国の国家としての主権を侵害するもので、憲法違反であることは明白です（実際にTPPの違憲裁判が起こされています）。

こんなわが国の独立性を侵害して植民地化する条約を、安倍政権はグローバル企業に操られた米国政府の要求のままに、批准を急いでいるのです。しかもTPP

は対外的な条約ですので、いったん批准されてしまうと、これを廃棄することは極めて困難です。これは明治時代の不平等条約の廃棄がどれほど大変であったかの、歴史を見れば明らかです。

◆Q四：日本のような先進国が訴えられようとはなすのじゃあ。

A：訴えられます。訴訟の濫訴防止も役に立ちません。

日本政府はわが国が不利にならないよう、濫訴防止の規定を盛り込んだので心配ないといいますが、政府の説明はウソです。「日本が訴えられることはない」「濫訴防止の規定が盛り込まれたので心配ない」というのは誤りです。ISDSで訴えられれば、多額の裁判費用や賠償金を税金で負担することになります。国民の福祉や環境、健康のために制度を作ることが妨害されます。これは「萎縮効果」と呼ばれ大きな問題になっています。実際に、米国とISDS条項のついた二国間協定を結んでいる韓国では、国民生活を保護する環境・福祉などの法律が、ISDS裁判になる前に次々に撤廃されるという状況になっているといえます。

◆Q五：アメリカの大統領候補も反対なんじゃあ。

A：さらなる要求を押しつけられるかもしれない

確かにアメリカ大統領選の候補者であるクリントン（民主党）もトランプ（共和党）もTPPに反対しています。しか

しどちらが大統領になったとしても、TPPが完全に葬り去られる可能性は五分五分です。クリントンは以前に「再交渉する」とも述べており、トランプも就任後は産業界からの圧力によって完全に破壊できないかもしれませんが。再交渉となれば、日本には関税のさらなる引き下げや、畜産農家への補助政策の廃止、保険・共済などの分野でアメリカからさらなる要求を突きつけられる可能性があります。また二国間の交渉をする過程で、米国が日本に要求を実現させることができず、ここで決めた規制緩和などの内容をTPP発効前に日本が実行してしまえば、元に戻すことはほぼ不可能になってしまいます。

◆Q六：交渉過程が秘密なのは、外交だから仕方ないのでは？

A：いまだかつてない秘密主義です。民主主義に反します

TPP交渉は、異常といえる秘密交渉が貫かれてきました。交渉参加前には「秘密を守ります」と約束する保秘契約書へのサインが求められ、交渉中には国民はもちろん与党の国会議員でさえ協定文策を見るのができませんでした。

大筋合意後、TPP協定文は公開されましたが、日本語に訳されたものは三分の一。そもそも日本語の条約本文が存在しないことが、根本的におかしいことです。また交渉の過程を記載した文書は発効後も四年間は秘密とされています。今

年四月の国会の審議で、野党議員が交渉内容の開示を要求したところ、出てきた文書は「真つ黒塗り」のノリ弁当状態でした。「知る権利」を奪い民主主義の根本に反するTPPの秘密主義は許されません。

◆Q七：政府の試算ではメリットもあると聞いたけど？

A：恣意的な数字操作による試算といわざるをえません

日本政府が二〇一五年一月に出した影響試算によると、TPP発効後でGDPは一三兆円上昇、雇用は八〇万人も増えるとしています。しかしこの試算には現実的でない前提によっています。米タフズ大学が今年一月に発表した現実的な試算では、日本はTPPの発効後十年でGDPが〇・一二％減少、雇用は七・四万人失われると分析しました。日本政府とは真逆の結果です。この分析に携わった経済学者は「日本政府の試算は驚くほど楽観的」と指摘します。東京大学の鈴木宣弘教授の試算では、農林水産業の減少額は一・六兆円にも上ります。日本政府の試算を鵜呑みにはできません。第三者機関や研究者による冷静な分析も踏まえた議論が必要です。

◆Q八：じゃあ、TPPはどうやって止められるの？

A：日米が批准しなければ、TPPは発効しません

TPP参加国ではアメリカと日本がG

DPの八割近くを占めているため、両国とも批准しなければ発効できません。その意味では日本はTPP発効の鍵を握ります。日本が批准しなければ、アメリカの結果を待つことなく、その時点でTPPは破棄となるのです。

秋の国会で拙速に批准を進めようとする安倍政権の姿は極めて異常です。十分な説明もなされないまま、批准の手続きを進めさせてはなりません。

各国の異なる状況を見無視して、企業や投資家に有利なルールを押しつけようとする交渉には矛盾と無理があり、また途上国政府や市民社会が強く反発しています。いのちと暮らし、民主主義の観点からも「TPPはいらない！」という声を上げ続けることが重要です。

◆Q九：農産物は例外があるから守られたのでは？

A：手をつけていない品目がないことを政府も認めました

守られたものなど一つもありません。TPPではすべての農産物の関税が例外なく撤廃されることが明らかになっています。日本の農産物のうち高関税のものは、重要五品目（米、麦、牛・豚肉、乳製品、砂糖）などごく一部にすぎません。これらの重要農産物は、地域や国土の保全や国民生活に大きな影響を与えるので、国会決議で関税の撤廃・削減をしないことを求めました。しかし政府は、この決議に反し重要五品目でも関税の撤廃に合

意してしまいました。野党の追及により、政府はすべての品目に手をつけたことも認めました。

◆Q10：漁業にも影響はあるのか？

A：漁業補助金が出なくなる恐れがあります

TPPの漁業との関係はあまり注目されていません。しかし日本は漁港の整備や燃料に補助金を交付したり、漁船を造るために低利な融資を行ったりすること、沿岸の零細な漁民をkarouうじて守ってきました。ところがTPPでは「濫獲（乱獲や過剰な漁獲能力に寄与する補助金）を規制し削減・撤廃しなければなりません。政府は、過剰な漁獲に当たらないから「補助金はなくなる」と説明していますが、この補助金が問題にされる可能性が大きいのです。

◆Q11：林業は自由化されているから影響はないのか？

A：国産材利用の流れに逆行しています

日本の林業では、ここ数年で自給率は上昇してきています。しかしTPPでは今残っている合板などの関税もやがて撤廃されます。そうなれば合板などの輸入がさらに増え、せっかく回復してきた自給率がまた下がってしまいます。国内の山林が荒れたり、国内外の環境に悪影響を与えたりする心配もあります。地方自治体などで木材の地産地消のために進められている地域材の利用振興策がISDS条項で訴えられかねません。林業は地

域経済の再生や環境を守るうえでも、今後の日本にとって守るべき大切な分野です。

◆Q12：国産表示があれば心配いらないのでは？

A：アメリカでは牛肉の国産表示が禁止されました

じつはアメリカではこれまで、国内法で牛肉や豚肉の原産国表示が義務付けられていましたが、これが撤廃されています。日本の農産物もTPPにより、原産国の表示ができなくなる可能性がります。産地の表示ができればいいと考える方もいるかもしれませんが、それも難しくなるかもしれません。国産表示や産地表示が海外企業などに不当であるとしてISDSで訴えられ、日本が敗訴するとは十分にあり得るのです。

◆Q13：遺伝子組み換え表示はなくなるのか？

A：表示はなくなっても輸入は増えます

遺伝子組み換え表示ができなくなる可能性は十分あります。今の日本の表示も不十分なものですが、より厳しい義務表示はできなくなります。現在日本で流通する組み換え作物は大豆・とうもろこし・菜種・綿実で、これらを使った食品には「大豆（遺伝子組み換え）」などと表示することになっていますが、組み換え作物が混ざっている場合は「不分別」と表示することになっていますので、実際に

は組み換え作物を使っているのに関わらず「遺伝子組み換え使用」と書く必要がないという甘いルールなのです。また油やしょうゆなど加工度が高いものは表示義務がないなど、抜け道がたくさんあります。TPPによって日本は、ますます遺伝子組み換え大国への道を突き進むことになるでしょう。

そもそも組み換え作物がなぜ危険かといえ、組み換えによって特定の農薬に強い作物を作り出し、大量の農薬を散布し雑草を枯らして当の作物の収量をあげるという仕掛けです。従って組み換え作物には、大量の農薬が残留している可能性が高いのです。遺伝子組み換え独占的大企業の米国モンサント社はこの種子と農薬をセットで販売し、しかも翌年にはこの種子は使用できないようにしていると言います。

◆Q14：食の安全基準は守られたのか？

A：消費者が求める厳しい規制はできません

政府は「今後も日本の安全基準が変わるようなことはない」と説明しています。政府は「今後とも日本の安全基準が変わるようなことはない」と説明しています。食の安全を守るために規制しようとする、明確な科学的根拠の提出が求められ、これは消費者には非常に困難なことです。遺伝子組み換え作物など、安全かどうか世界でまだ科学的に結論が出ていないものについても、はつきり危険だと証明する必要が出てきます。ヨーロッパでは「予防原則」

といって、科学的に因果関係が十分証明されていない状況でも規制を行うことができますが、こうした慎重な考え方は通用しなくなります。

日本政府は、BSE対策や遺伝子組み換え食品の承認、食品添加物の使用基準、農薬の残留基準などについても規制緩和をどんどん進めています。その背景にはTPPの貿易優先の考え方に沿い、アメリカからの要求に対して日米平行協議で譲歩を重ねているのです。TPPが発効すれば、消費者が求める厳しい規制はこれまで以上に実現できなくなります。国民を危険にさらして、米国の利益を与える仕組みなのです。

◆Q15：検疫がしっかりしていれば大丈夫では？

A：「四八時間ルール」では食の安全を守れません

現在日本に入ってくる輸入食品は、平均九二時間あまりかけて検疫所でチェックしていますが、TPPでは四八時間以内に検疫を終えて国内で流通させることが原則となります。明らかに検疫体制がおろそかになることが予想されます。これまでにもトマトから基準値を大幅に超える残留農薬が見つかった例がありましたが、判明したときにはすでに全量が消費済みで四万人以上が食べてしまいました。以前は検疫所で安全性が確認されるまで留め置いていたのですが、近年貿易を優先して安全性が軽視される傾向に

あります。TPPの発効により、検疫がさらにずさんになる可能性が高いのです。

◆Q一六：医療制度は変わらないんでしょ？

A：安価な医薬品が手に入りにくくなります

確かにすぐに「公的医療保険制度（国民皆保険）に関する変更は行われぬい」かもしれないが、製薬大企業に有利なルールが盛り込まれました。アメリカの医薬品・医療産業が巨大でいかに強力であるかを考えれば自明です。各国の交渉で最後まで揉めたのも、薬に関する分野でした。協定では薬の特許期間の延長やデータ保護の期間の延長される方向です。これが何を意味するかといえば、TPPが発効すれば新しい薬の価格がなかなか下がらず、安価なジェネリック薬品の製造が困難になるのです。これは患者の負担に直結し、保険料の引き上げにもつながります。途上国は新薬のデータを早く開示することを求めている、「国境なき医師団」も「医薬品入手の面で最悪の貿易協定として歴史に残る」と痛烈に批判しているほどです

◆Q一七：国民皆保険制度が守られたなら大丈夫では？

A：制度の内側から壊されていきます

政府は、国民皆保険制度を支えている薬の価格を決めるプロセスは変更されないと断っています。しかし制度の枠組み自体は変わらなくてもこれまでよりさらに

「企業寄り」の運用に変わっていく恐れがあります。TPPにより保険収載の薬価の決定に対して製薬会社（主に米国の）が不服申し立てをできるようにになります。薬価が高く設定されると、それだけ製薬会社の儲けが大きくなる一方、保険からの支払いが困難となり、国民皆保険の破綻につながっていきます。

現在すでに、ウイルス肝炎の薬が一粒六万円という法外な薬価がついている薬も存在します（一月の治療分の小瓶一本で二百数十万円になる。インドでは同じ薬が一粒二千円程度といっています）。現在の薬の使用については高額医療費制度により補助が受けられて、患者が月額数万円以上支払うことはない（後は保険から支払われる）のですが、適用例が多くなれば、日本の保険制度の崩壊につながることも目に見えています。TPPによってこのような法外な薬価をつけるケースが増加することが予想されます。

また医療への株式会社への参入や混合診療の導入が加速して、患者にお金がかねれば、保険だけでは十分な医療が受けられなくなる。つまり生命にも格差が生まれるという事態が現実起こってくる恐れが大いにあるのです。

◆Q一八：かんぽ生命や共済はどうなるの？

A：民間保険と同じように扱わなければなりません

TPPでは、金融の定義は「すべての

保険、銀行、その他の金融サービス」とされ、「保険」が金融の一つに位置づけられています。「共済」という記述はありませんが、これまでのアメリカや業界団体の主張では、共済が「保険」に含まれているのは明らかです。

アメリカ最大の狙いは一つ目に、**国内での医療保険市場の拡大**です（すでにアフラックなどアメリカの生命保険が日本に参入している）。アメリカはかねてより、かんぽ生命や共済（JA共済・全労済・コープ共済・都道府県民共済など）に対して「民間保険会社より優遇されている」として、金融庁に対し民間保険会社と同じように共済団体を管理・監督させるよう要求しています。保険会社と同様の基準で運営されれば、利潤第一の経営が求められ、非採算部門などは撤廃され、加入者の立場に立った運営はできなくなります。二つ目の狙いは、共済団体が将来の給付のために積み立てている積立金を金融市場に還流させることです。郵政民営化による「かんぽマネー」が財界や機関投資家、海外投資家の運用財源となったように、共済団体の積立金運用を金融市場に還流させようとしています。アメリカは毎年のようにかんぽ生命や共済に対して規制強化を要求してきており、TPPにおいても「米側関心事項」として、保険（共済を含む）が位置づけられています。

◆Q一九：金融って私たちに関係あるの？

A：金融危機から国民生活を守れなくなります

TPPの根本にあるのは、金融も国境の壁を取り払い、資金の流れを阻害することなく自由に流動させる新自由主義の思想です。シテイバンクやゴールドマンサックスといった、ウォール街のメガ金融グループが主導する国際金融資金の流れを止めることはさらに困難になります。こうした勢力が日本で狙っているのは、ゆうちょ銀行・かんぽ生命やJA共済などの資金、さらには年金（GPIF）・日銀マネー・企業の内部留保など、日本が戦後七〇年かけて蓄えてきた富です。二〇〇七年郵政民営化の時の郵便貯金・簡易保険の資金流出と同じで、TPPはそのバージョンアップといえます。これらの資金が国際金融市場に流出すれば、**日本社会の貧困化**がより一層進むのは必至です。

政府は、日本政策金融公庫など国有企業をすべて民営化し、外国資本の傘下にしても構わないと考えているのです。TPP参加の中で例外を設定しない国は日本だけです。まさに「日本を海外に売る（売国）」行為です。

◆Q二〇：著作権の分野はメリットもあるんでしょ？

A：米国流の著作権ビジネスが進みます

著作権に関してアメリカの勝利であり「知財の米国化」が進むことになりま

す。アメリカの映画やアニメ、キャラクタービジネス、巨大IT企業などは特許・著作権料で一五兆円あまりもの外貨を稼ぐ輸出産業。TPPでは当初から著作権保護強化と厳しい罰則規定を求めたのです。《著作権保護期間の延長》…日本では著作権の保護期間は作者の死後五〇年ですが、七〇年に延長されます。

《非親告罪化》…日本では著作権侵害は、著作者自身が告訴しなければ国は起訴・処罰ができない「親告罪」です。しかしTPPでは非親告罪化、つまり本人以外の第三者からの通報によって捜査可能となり、パロディや二次創作などの萎縮が懸念されます。《法定賠償金制度》…日本では著作権が侵害された場合、権利者の実損害のみを賠償金として求めることがほとんどで金額は少額です。米国では賠償金は巨額であり、日本でも米国並みになることが予想されます。

### ◆Q二一…公共事業や地域経済はどうなりますか？

A…地域外、特に外資系企業に仕事を奪われる恐れがあります

公共事業についてもTPP下では国内企業と同じ条件を外国企業に与えなければなりません。一つ目の問題は「使用言語」です。英語の使用を強制され、入札の際の書類を英語化しなければなりません。二つ目は調達に「公正性の確保」です。外国の会社に対しても、国内企業と同等の機会を与える必要があります。三

つ目は日本政府が、中央・地方、政府団体のほとんどすべての分野について、最大級の市場開放を約束しているのです。その結果、世界最大級の建設会社「ベクター」や、資源開発会社「ハリバートン」などの巨大外国企業が、政府や自治体が行う公共事業などを落札していく可能性が高まります。日本の調達構造が変えられ、海外資本による地方経済への浸食が進むことになり、地域の建設業者や中小企業の倒産も避けられなくなるでしょう。また日本の地方自治体では、地域経済の振興のために、地元の中小企業への発注を積極的に行うところが増えていきます。しかしTPPでは、こうした経済振興策が

できなくなります。このようにTPPは地域経済の振興策や自治体主導の地域づくりに大きな障害になり、地域の中小企業、経済を育てることが許されない状況に追いやられます。

### ◆Q二二…公共サービスにも影響はありますか？

A…暮らしや地域の社会インフラの存続が危うくなります

TPPには「国有企業」の章が設けられ、国有企業は一般の企業と同じ土俵で競争をしなければならないという考え方が貫かれています。「非商業的援助」つまり財政支援が禁止されているのです。これは大きな問題です。

政府が出資して公的なサービスを提供する企業には、金融、郵便、病院、鉄道、空港、政府機能・政策を担うものなど、国民生活にはなくてはならないものが多

くあります。しかも必ずしも採算がとれなくても維持をしなければならぬものがあります。こういった公共サービスというのは、国民生活に欠かせないもので、民営化されて採算がとれないからといって停止できないものです。このような社会インフラを資本の論理に任せてしまうと、国民の生活が破壊されていきます。(民営化された水道代金が値上がりし、支払えない多くの国民が水道を使えないという国さえあります)

### ◆Q二三…環境に関する政策に影響はありますか？

A…大企業や投資家の利益が優先されます

貿易や投資の自由化を前提とするTPPでは、環境保護や気候変動対策などの国際的な課題よりも、大企業や投資家の利益が優先されています。そのため、TPPでは環境保護はあくまで「努力目標」であり何の義務づけもありません。具体的な罰則や企業への責任追及を求める規定がほとんどないのです。

脱原発や低炭素型社会への移行など、私たちにとって望ましい政策への変更も「企業の利潤追求の障害だ」とされて訴えられる危険は十分にあり、そうした政策や規制を進めることを委縮させる懸念もあります。実際に脱原発を進めるドイツでさえ、米国の原発メーカーからISDS訴訟を起こされてドイツ政府は厳し

い状態にあるといえます。

ましてTPPが発効すれば、日本では脱原発をするために莫大な費用を原発メーカーに支払うことを要求され、事実上脱原発ができなくなる可能性が高いのです。

### ◆Q二四…私たちの雇用は大丈夫？

A…労働条件や雇用にとって有害としか言えません

日本政府はTPPが「労働条件悪化の歯止めになる」と説明していますが、それは期待できません。TPPは貿易障壁をなくし、自由化・規制緩和を推進するため、働く人の労働条件や権利は後退してしまいます。グローバル企業が増えます国境を超えて自由に展開することを保障する内容になっています。安い賃金の外国人労働者を導入して、国民を彼らと競争をさせ、さらなる労働条件の悪化をもたらすと予想されます。

すでに日本では、TPPの先取りともいえるような派遣法の改正、解雇規制の緩和、残業代の撤廃、外国人労働者・研修生の受け入れ規制緩和など労働法制の改悪が進んでおり、この傾向がTPPにより加速すると考えられます。【以上】

### ■TPPは後戻りできない

TPPはいったん成立してしまうと、国際条約であるためにそこから抜け出すことができなくなります。その上TPPは国内法より上に来て、強制的に国内法が変更せられることとなります。これは国の主権・自決権が侵害されることを

意味します。これは憲法に違反しており、国家という枠組みを破壊するものです。一方米国では、TPPより国内法が上であり、国内法が強制的に変えられることはないといえます。この意味でTPPは不平等条約です。またほとんど完全に秘密主義で交渉内容も公表されません。民主主義を破壊するものです。

TPPは日本社会を、法律をはじめとする社会制度を全面的に根本から変えて国民の命と生活を犠牲にして、主に米国グローバル企業の「儲けの場」「草刈り場」として差し出すものです。その分野は、農業、投資・金融をはじめとして、社会の全分野に及ぶものです。とくにわが国では、日本国憲法によってこれまで守られてきた各種の人権、生存権、最低限の文化的生活までも脅かされることになる。そういう仕組みを国家の枠組みを超えて恒久的に作ってしまおうとするものです。その「果実」を得るのは、圧倒的に多く米国のグローバル企業と少しの日本の大企業だ、ということ。その「果実」は絶対に九九%の国民には「したり落ちて」こないのです。

## ■呼びかけ(パンフレット)のアクションを起すぞ!!

①広めよう! まずは身近な人に伝えましょう。「TPPカフェ」などを開きませんか。このブックレットを教材にするのもおすすめです。分析チームのメンバーも説明にまいます。

②働きかけよう! TPPは日米が批准しなければ発効しません。地元の国会議員

やTPP特別委員会の議員に、問題点を伝えて批准阻止を働きかけましょう。FAXや電話なども有効です。

③行動しよう! デモをしたり、街宣をしたり、アピール行動をするのも大切です。各地で呼びかけ、多くの人に働きかけましょう。

## 【参考】

◆今回ご紹介したパンフレット「続そうだったのかTPP 24のギモン」は、ネットで「TPPテキスト分析チーム」と検索していただくと、「そうだったのか! TPP」のページが出てきます。ここから「続そうだったのかTPP 24のギモン」と「そうだったのかTPP」の二冊のパンフレットを無料でダウンロードできます。必要なら実費程度でこの実物を送ってもらえることができます。ぜひ周囲の方々と学習会を開いて、TPPの正体について知って頂きたいと思えます。

◆堤未果氏の新刊「政府はもう嘘をつけない」(角川新書)は、TPPや改憲問題を含めた日本の直面する危機をわかりやすく解説をしています。ぜひお読みください。

【付記】米欧版TPPであるTTIPをドイツが拒否したと伝えられました。決裂の理由はやはりISDS条項が大きいということ。まともな国の判断とは、当然こうであるべきなのです。

## 素老人☆よもだ帳 (30)

坂本一光

◆シールズの解散に寄せてー わかるということ、私の中の私はあなたの中の私であること

シールズ(SEALDS)自由と民主主義のための学生緊急行動)の解散宣言(注)を読みながら、昔読んだ『パンセ』の一節を思い出した。その心は、私の中の私はあなたの中の私である、ということである。

『パンセ』の一節にパスカルは言う、『自然な談話が、ある情念や現象を描くとき、人は自分が聞いていることの真実を自分自身のなかに発見する。それが自分のなかにあったなどとは知らなかった真実である。その結果、それをわれわれに感じさせてくれる人を愛するようになる。なぜなら、その人は彼自身の持ちものを見せつけたのではなく、われわれのものを見せてくれたのだからである。このようにして、われわれと彼とのあいだの知的一致が、われわれの心を彼を愛するようになると必然的に傾けるばかりでなく、この恩恵がわれわれに彼を好ましくさせるのである』と『パスカル』『パンセ』前田陽一・由木 康訳、中公文庫、十六頁、一九七三年。同様の趣旨は『君主論』にも述べられていた。曰く、『みずからが賢明でない君主は、良き助言など受け容れられない。良き助言というものは、誰から発せられても、必ず君主の思慮の

うちに生まれるのであり、良き助言から君主の思慮が生まれるのではない』(マキアヴェッリ『君主論』河島英昭訳、岩波文庫、一七七―一七八頁、一九九八年)。ふり返ってみれば、安倍自公政権が集団的自衛権の行使容認を憲法に違反して閣議決定したのは二〇一四年七月一日、シールズの結成は二〇一五年五月三日、同月十四日には安倍内閣が戦争法案(安保関連法案)を閣議決定し十五日に国会に提出した。シールズが毎週金曜日夜の国会正門前抗議行動を開始したのは六月五日、最初の参加者は数百人であった。その前日には、

違憲、違憲、違憲、息呑む憲法審査会が衆議院で開かれていた。金曜行動はその後九月の成立強行(二〇一五年九月十九日未明、参議院本会議で強行採決)まで継続、八月三十日には「総がかり行動実行委員会」とシールズが呼びかけた「国会前十万人・全国百万人行動」が取り組まれた。

人間精神の独立と自由  
百万の声議事堂にとどろきし夏

その後の去る七月十日参議院議員選挙に至るまでのことは素老人も本紙に度々書いてきたので今回は省略する。

さて、『しらけ鳥飛んでゆく南の空へ』と小松政夫氏が歌ったのは一九七八年。七十年代から八十年代の頃に、三無主義(無気力・無関心・無責任)とか四

無主義（三無に無感動を加えるという）とか、しらせ世代とか新人類とか、若者氣質が揶揄される時代があった。しかしそれは、当の若者たちにしてみれば、経済成長の絶頂期が過ぎ去ろうとしている（あるいは過ぎ去った）ことに目を塞ぎながら大人たちがなおもバブル崩壊に向かって狂ったように突っ走りはじめた（あるいは突進し続けている）時代風潮に冷めたまなざしを向けるほかなかった。そういうことに過ぎなかったのかもしれない。若いからものを考えない、経験を積んだらもの事の本質がよく見える、そういうことがないとは言わないが、それは必ずしも常に真ではないだろう。シールズはそれより数世代後の若者たちである。政治の支配層にとっておそらく彼らは眼中に無く、世間は彼らに〇〇主義という呼称さえ与えていなかった。暴力主義・貧困主義とでも言うべきものが支配する絶望的な世界からこの若者たちが立ち上がり、そのしなやかな言動は、立憲主義と民主主義・日々の暮らしの安全と安心・平和な世界を思う人びとの心に火を点けた。老いた世代には、

生きて行く基本に政治があることを  
うかうか忘れ来しことを恥ず

そんな思いがあったかもしれない。組織に縛られることも、したがってものはや失うものもないことを自覚した老人たちには、数十年の経験に基づき、一線を越えた政治を許さない強い思いがあったら

う。その思いで、同じく組織に所属してないがゆえに組織に縛られず、自らの良心に従って自由に感じ考え行動する若者たち（その特性を典型的にもつのは大学生であろう）に呼応したのである。晩年の加藤周一氏が呼びかけ、未来への希望はそこにあると言った「老人と学生の連帯」である。私は、二〇〇七年十一月十六日の『Peace Night 9 in 早稲田大学』における彼の講演『老人と学生』を思い出す。そこに子育て中の世代や働き盛りの世代もそれぞれの心とかたちで加わりある瞬間にはおそらく津々浦々で百万人の隊列が声をあげていただろうと思う。潜在的には、おそらく数千万人の声なき声があった。

幾百万の眼が国会に注がれし夏  
二〇一五

憲法を乱暴に踏みじり、国民の声にまったく耳を傾けようとしないう安倍自公政権の政治は、もはや保守政治の枠組にも当てはまらない独裁政治に陥っていた。

シールズという現象には、いかなる表現がふさわしいか。向こう見ずに、天真爛漫に、率直に、潔く、脳天気な、深く、：どう表現するにしても私は心からの敬意をもって言うのであるが、「民主主義とは何だ、これだ」と彼らが声をあげたとき、多くの人が一瞬、虚を衝かれたように思ったに違いないと思う。そしてまたその瞬間、「そうだ、これだ」と自身の内なるものに納得したであろう。納得でき

るだけのものを秘めていた人々は、先に言ったとおり、「私の中の私はあなたの中の私である」ことをそこに見出し、かつてないほどに（あるいはかつてそうであったように）それぞれのかたちで運動に参加していった。火種はあり、火は密かにであれあるいは顕かにであれ継がれており、シールズや総がかり行動の呼びかけに応じることで、火を守る心はかたちを与えられたと言えるだろう。

『SEALDs』は解散します。しかし終わつたというのなら、また始めましょう。始めるのは私であり、あなたです。何度でも反復しましょう。人類の多年にわたる自由獲得の努力から学びながら。孤独に思考し、判断し、共に行動し、そして戦後百年を迎え、祝いの鐘を鳴らしましょう——シールズの最後のメッセージに込められた思いは深い。そして、『その積み重ねは、長い時間をかけて社会に根をおろし、じつくりと育ち、いずれは日本の自由と民主主義を守る盾となるはずです』とその決意は固い。

ありふれた平和ようやく古希越える  
戦せぬ国に百寿はまだ来ない

生きて行く基本に政治があることを  
シールズに見し戦争法の夏

幾百万の眼が国会にまた注がれる  
二〇一六

シールズの若者たちは何を示したか。  
自分の中にある最良のものに背かず、自

分が誇りとするものを裏切らず、自らの内にある良心のみに従って行動する人間は自由である。シールズは自由な人間の姿、その美しさを示したのだと思う。未来は暗闇ではないことを示すその姿に、どれほど多くの人がびとが勇気づけられ、元気づけられたことだろう。ありがとう、素老人もまた、よもだは言つてもぐらぐらせずに、長生きしてみようと思う。長生きは三文の得、そんな時代が来るかもしれない。

（注）シールズの解散宣言はこの国の歴史に刻まれる宣言になるであろう。故に、少々長くなるけれども以下に全文を紹介しておきたい（本紙の表記法に合わせたため、宣言の体裁は、インターネット上にシールズが公表したオリジナルと異なります）。本紙『芥川だより』もまた歴史にその名をとどめるであろうと信じて。

『二〇一六年八月十五日、戦後七十一年の節目をもって、SEALDsは解散します。私たちは、日本の自由と民主主義の伝統を守るために、立憲主義・生活保障・安全保障の三分野で、明確な立場を表明し、デモや街宣などの行動を起こしてきました。』

とくに昨年の安保法制の強行採決に反対する国会前でのデモや、今年七月十日に行われた参議院選挙に向けた野党共闘の実現、市民参加型の選挙に向けた行動などを行ってきました。

結果として、ほとんど不可能だと言わ

れていたにもかかわらず、野党共闘のもと、参議院選挙では三十二の一人区全てで野党統一候補が決まりました。また、選挙の風景にも変化が起きました。昨年の夏、自発的にデモや勉強会などを自主的に行った市民たちを含め、選対には多くの人々が積極的にボランティアとして参加しました。これまで選挙に関わることの無かった人々が自ら応援演説に立ち、電話がけをし、ポスターやフライヤーをデザインしてポスティングしたので、候補者自身も、市民との関わりの中で、よりいっそう候補者としての自覚と責任を持つようになっていきました。

しかし、当然ながら、私たちは選挙結果を含め、これで十分だったとは思っていません。改善すべき問題点は山のようにあります。市民が立ち上げる政治は、ようやく始まったばかりです。個人として路上に立つのと同じように、「わたし」の声で、日常の目線から政治を語る。隣近所・家族・友人・恋人と政治について語り合うこと。自分の選挙区の候補者に会いに行き、自ら選挙の景色を変えること。こうした営みは日々行われるもので、一朝一夕に政治を変えるものではありません。この動きを未永く、ねばりよく続けていく必要があります。その積み重ねは、長い時間をかけて社会に根をおろし、じつくりと育ち、いずれは日本の自由と民主主義を守る盾となるはずです。あの戦争が終わってから、七十一年が経ちます。私たちは、立憲主義を尊重する政治を求めます。私たちは、持続可

能で健全な成長と公正な分配によって、人々の生活の保障を実現する政治を求めます。私たちは、対話と協調に基づく平和的な外交・安全保障政策を求めます。そして私たちは、戦後七十一年でつくりあげられてきた、この国の自由と民主主義の伝統を尊重します。

SEADS は解散します。しかし終わったというのなら、また始めましょう。始めるのは私であり、あなたです。何度でも反復しましょう。人類の多年にわたる自由獲得の努力から学びながら、孤独に思考し、判断し、共に行動し、そして戦後百年を迎え、祝いの鐘を鳴らしましょう。

This Emergency Action is over.

But the Unfinished Project Must Go On.

二〇一六年八月十五日

SEADS

(Students Emergency Action  
for Liberal Democracy's)  
自由と民主主義のための学生緊急行動』

(かたちは心であり、心はかたちになる■大分の素老人)



哲学屋のつづき (26)

ドイツ哲学の旅(2) パック旅行編

祖蔵 哲

鉄道で巡る素顔のドイツ

前編は七月七日、日本発から七月十二日までの六日間。ドイツ国地図を時計に例えると、北東の一時のベルリンから北西十時のフランクフルトまで、ぐるっと回ったことになる。前回もひつこく書いたが、パック旅行は「質より量」。平均的な旅行者の関心をもとに観光をするので、それぞれの印象も平均的になる。移動時間と利便性が第一のためバスが使われる。団体行動であるから現地での人々との接触はほとんどない。団体内での限り閉ざされた空間の中で移動するので外の景色以外日本にいるのと変わりは

必要ないと考える人にとっては何の問題もない。しかし、「旅」とは何かである。哲学は当たり前のことを問うてみる。『月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。舟の上に生涯をうかべ馬の口とらへて老を迎ふる者は、日々旅にして旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。』く松尾芭蕉「奥の細道」である。私たちの人生が旅である言っている。様々な場所でも多くの人々に出会う。日々、新しい。同じ時は二度と出会えない。現実に触れ合い、体験してみてもこそ人生であり、哲学ができる。

近頃、日本にも大勢の外国人が観光にやってくる。特にアジアの国々からのグループは、日本式の団体旅行が基本だ。日本にいるとこれら大勢の団体客がどつと観光地や繁華街に出没するのを冷ややかな目でみている自分がいる。しかし、私たちも一度、日本を離れて外国を団体旅行すると現地の人からは同じような目で見られているのだ。「経済のためだ、我慢しよう。」と。最近、バーチャルリアリティなる技術が発展し、その場に行かなくても、代わりにロボットが行って、自分がそのロボットになり、現地に行ったのと同じ体験が出来るそう。その感覚に近い。人々との交流なんて面倒だ、

さて、いつものように前置きが長くなった。七月十二日の夜、フランクフルトで私たち七人の哲学の旅人は、パック団体から離脱した。他のパック旅行者は明日帰国する。短い旅であったが寝起きを共にした仲間、残りのたび気をつけね、と別れの挨拶をもらった。旅行会社は責任回避のため一応私たち全員から「旅行離脱確認」なる書類にサインさせた。今後はみなさん個人の責任で旅行して下さい、ということである。で、すべて自分たちでの行動である。もちろんこれから旅行日程はあらかじめ決めている。そしてホテルも予約済み。移動手段は列車である。ヨーロッパは飛行機や自動車は移動手段として有効であるが、列車は別の楽しみもある。日本での列車の旅も同じであるが、駅に着くとその町や村の空気がどつと車内に入ってくる。言葉はわからないが現地の人々の会話から土地

の匂いが感じられる。運がよければ地元の人々との思い出になる出会いもあるかもしれない。これらは決してバーチャルリアリティでは体験できないであろう。と言っても情報化の恩恵は利用している。ホテルはネットで簡単に予約出来るし、ユーレイルパスも購入できた。ユーレイルパスは外国版「青春18キップ」みたいなものだ。ユーレイルパスでは特急や日本の新幹線にあたるICEも乗れる。一ヶ月有効で一〇日使用で五万円位、かなりお得である。ユーレイルパスを最初に使う場合は最寄りの駅で本人認証をしてもらふ必要がある。そこで私たちがバック旅行の合間をぬってあらかじめ認証をしてもらおうと機会をねらっていたが、団体行動のためなかなか適当な時間とれなかった。それならと、夜、ホテルに到着してからと思い、早めのチェックイン行程の時に駅へ行ったが事務所は既に閉まっていた。まだ、夕方六時である。夏休み期間かも知れないがお客様サービスからは少し遠い。ご存知のようにヨーロッパの鉄道は改札口というものがない。乗客は直接、列車に乗り込み、車内で検札を受ける仕組みである。昔は改札口があつて係員がキップをチェックしていたのだが、ある時から人員合理化で改札を廃止しそれから現在に至っているという。ヨーロッパは国有の鉄道が多く、経営の問題をどこも抱えているのだろう。だからどうか、サービスが悪い。しかし、駅の中には飲食店やスーパーマーケット、土産物屋が入り込み、駅舎の名前す

ら〇〇マーケットとなっている所もある。そして、この乗車システムであるが、最近は不正乗車が増加しているそう。大量に流れ込んでいる難民や若年層に多く、三回不正すれば裁判所送りになるけれど支払い能力がないとか。いずれ、この性善説に立つシステムも見直される運命にある。

事前認証をしたのは第一回目の乗車が朝早いので当然、駅事務所が開いてないからである。なんとか認証をすまして十三日の朝、フランクフルト駅から今日の観光地ボンとケルンを目指して列車に乗った。今回の唯一ドイツ北部へ行く。ドイツという国は北低南高である。豊かな地域は南部に多い。パスではICEにも乗れるのだがあえて特急ICEに乗る方を選んだ。理由はライン川である。ライン川は船による遊覧が有名であるが、実を言うと列車の方が眺望は良いらしい。ICEは川沿いではなくトンネルを通るため敢えてこちらを選択。ボンまでは二時間弱、三〇分位の違いである。急ぐ旅でもないゆつくりと。で、眺めはというとやはりこちらの方がよかった。かのローライの岩山もバッチリ見えた。

ボンに嘗ての西ドイツの首都、でも今では少しさびれた町になっています。ここでの私たちのお目当はベートーヴェンの生家。ボン中央駅から歩いて一〇分くらい、普通の家なので見過ごしてしまいがちですが、壁の色が赤っぽいので少し目立ちます。家は三階建てでベートー

ーヴェンは最上階の部屋で生まれたとか。一七七〇年のことです。しかし、二〇歳後半から音楽の生命である聴覚をだんだんと失いました。まるでブリキのラッパ型をした補聴器が展示してありました。こんなのではとても音を聞き取れなかったのだと思います。私が思うに演奏者であれば聴覚を失うことは致命的ですが、作曲家であればそれ程と。なぜなら、優れた作曲家は絶対音感なるものが体の中にあり、楽譜に書いてある音符が頭の中で響いています。むしろ、心で響く音により曲が作れるのですから、よりスピリチュアルになるはず。ベートーヴェンが悩んだのは音楽そのものの出来よりも、聞いた人々の反応が伝わらない方かもしれません。自筆の楽譜や、赤いスカーフを巻いた例の有名な肖像画など沢山の展示品がありました。残念ながら私はベートーヴェン・フリークではありませんのでそれ程は感激しませんでした。そうであればまさしく聖地でしょう。

ベートーヴェンハウスを出ると、そろそろお昼です。ツアーではないので決められたレストランはありません。で、どうするかと言うと、移動時間の節約と経費節減のため、悪いこととは知りながら、ホテルでの朝バイキングで昼食分を調達するのです。パンはもちろんのことチーズあり、バナナあり、スナック食あたりです。ケルンを目指して再度駅に向かいました。駅に到着しケルン行きの列車の出発ホームを確認するためそこらの人

に聞きました。がどうも日本式の発音ケルンでは通じません。ドイツ語独特の発音ウムラルトです。"Köln"。Oの口の形をしてEと発音するのです。難しい。各停列車で三〇分、ケルンに到着しました。もちろん、目的はケルン大聖堂ですが、探す間もなくそれはありました。駅の前というか、あまりにも近すぎて、そして大きすぎて聖堂は全体が把握できません。すぐ前の階段を上ると聖堂の入り口、階段には多くの人々が座っています。お昼でしたので、さすがに難民の集団は見られませんでした。ドイツに限らずヨーロッパ全体が今も不穏な状況なのに変わりはないのですが、今のところは平穏です。ケルン大聖堂といえはゴシック様式で最も有名な教会。ゴシックといえは、もともとはゴート族を意味しており、キリスト教とは何の関係もなかったもの。ヨーロッパにキリスト教が広まるにつれ、オリジナルの民族の文化と同化した結果生まれた様式。よってゴシック建築様式の教会はヨーロッパの森を意味しており、砂漠の宗教、キリスト今教との関連は何もない。そんな歴史的な回顧をしながら時間は過ぎて、私たちはまた今朝来たフランクフルトに戻った。フリーな旅行のため時間も自由になる。初めて列車旅行のため少し疲れたので早めホテルに戻りベットについた。

翌日一四日の目的地はワイマールです。昨日のケルン行きは北部でしたが、今度

はフランクフルトから東へ列車で三時間。ドイツ地図時計の針は十二時に戻ります。今度は高速鉄道ICEに乗った。しかし、座席はすべて指定席。あらかじめ予約する必要があるみたいだ。しかし、それぞれ座席の上の電光掲示板をみると、この席はどこからどこまでが予約です、と駅名が書いてある。て事はそれ以外の区間は座れるということ。日本の新幹線にもない便利な表示。私たちは知らないのの良いことに指定席に座っていました。

すると早速、DB(ドイツ鉄道)の検札員が来てキップを拝見となりました。しかし、何もお咎めなし。かなり大らかです。ワイマールは神聖ローマ帝国時代にはザクセン＝ヴァイマル公国、帝国解体後アイゼナハ大公国の首都でありました。公国時代には、一七〇八年、二三歳のJSバッハが宮廷音楽家を務め一〇年間で暮らし、また一七八二年、ゲーテが宰相として仕え亡くなるまで五〇年間このここに暮らしたことも知られていません。まだ、通勤客が多い電車から降りるとワイマールの駅は思ったよりも小さかったです。到着してまず向かうところはホテルです。なぜなら、私たちグループはもう旅行社の団体ツアーではないので自分の荷物は自分で運ばねばならないからです。重いスーツケースを引きずり観光はできませんのでまずホテルへ。歩くと大変なので相乗りタクシーで市の中心部へ。中心部といってもそんなに広い

都市ではないので一〇分くらい。本日のホテル「エレファント」へ到着しました。象さん口珍しい名前のホテルですね。しかし、この名前を聞いてピンとくる方がおられるとしたら、相当ドイツ通です。というか歴史通。私は偶然にもこのホテルを知っていました。それも、半年ほど前、偶然テレビで見ました。報道ステーションという番組でキャスターの古舘伊知郎が降板するという前の一連のシリーズでこのホテルが登場したのです。どういう経緯かと言うと、自民党の憲法改正案の浮上にともない、緊急事態法が議論されています。いきなり他国が侵略してきた時や予期せぬ事件が発生した時に、自衛隊を動かしたり、警察権を発動するのに国会審議や裁判所の判断を待たずには時間がかかって適切に対応できない。よってこれらの承認なしに決定できるような権力を集中するものです。過去の歴史を知らない人は、しゃないな一時的やったら、と大半が消極的賛成をしています。しかし、このような状況が非常に危険であると警鐘を鳴らしていたのがこの番組でした。私は偶然見たのですが大変すぐれた映像だと感心し、同時に古舘氏の降板を時代の転換期と再認識したのです。

個人自由尊重を継承することは勿論、二〇歳以上男女の普通選挙、社会保障制度の導入など近代憲法から現代憲法への転換点となった画期的なものでした。しかし、その制定からわずか七年後の一九二六年、第二回ナチス党大会がここワイマールで行われています。原因はワイマール憲法にある大統領の権限集中でした。ベルサイユ体制に苦しんでいたドイツ国民は民主的な選挙によりナチスを第一党に選びました。そして大統領によって一九三三年一月ヒトラーは首相に指名されました。その後は全権委任法を制定して狂気の道を通ったのです。ヒトラーはこのホテルのバルコニーで演説しました。ここワイマールで演説することは、自分達は正当な方法で選ばれたものだということを主張したことを意味します。君達、国民が選択したのだと。狂気が始まった場所がここなのです。

タクシーがホテルの前に止まりました。早速、バルコニーを見上げました。まさか、ヒトラーの像があるなんて思いもしませんでした。誰かいます。ええ、ええ、まさかヒトラー、そんなはずは。よくよく見ると違いますが、何故か知ってそうなんです。少し考えてみました。法衣をまとって小太り、あつ、ルターだ。なんでルターかは知りませんがとりあえずホテルの中に。やはり、象さんの置物がありました。チェックインして割り当ての部屋へ。ここで疲れがどっと出てきました。なにせ八日間バック旅行だけ

もかなりハードな行程でさらに旅を続ける。それにしても他の六人は元気だ。六〇代中頃の私は中くらい、七〇歳を越えている人もいる。他人のことはどうでも、身体第一と考え取って皆と別行動で。しばらくホテルで休憩することに。皆はお目当てのゲーテハウスへ。一人のホテルの部屋に残されうたた寝をすること二、三時間、昼も過ぎてそろそろ起きなくては思い外へでた。お腹が空いてきたので広場に屋台が出ていたのでサンドを食べる。それからおもむろに市の中心部に向かって歩いた。少し歩くとゲーテの旧邸宅がほぼ原型のまま保存されていた。ゲーテ旧邸宅から三〇〇メートルほどの場所にあるヴァイマル国民劇場は、ゲーテやフリードリヒ・シラーらが自作のオリジナル演劇作品を上演したドイツ古典主義関係の歴史的遺構である。広場にはこれも有名なゲーテとシラーの銅像があった。もちろんここでは先ほど話したワイマール憲法制定会議が行われた。国民劇場の正面向かい側には、広場をはさんで建築や工芸デザインで有名なバウハウス博物館がある。周辺には、グロピウスの主宰したバウハウスの旧校舍(現在バウハウス大学・ヴァイマル校舎) およびヴァイマル市民会館などバウハウス関係の建築物が点在している。ふらふらと大学の構内をうろついているとなにやら黄色い目立つ建物が外に見えた。地図を見るとリストの住んでいた家らしい。リストはもちろん作曲家として有名であるがピアノリストとしても名声を博した。そんな

なせいでピアノ曲も超絶技巧を要求されるものが多い。一八四八年から一〇年ほどニコライマルにバッハと同じく宮廷音楽家として招かれ住んでいた。彼はもともとハンガリー出身であるがほとんどをドイツで生活している。恋多き人としても有名で何人もの女性をやり過ぎた。羨ましい。まだまだ疲れが取れないのでリストハウスを出てふらふらしていると、我らのグループに出会った。そろそろ夕食である。皆でレストランに入ることにもうツアーではないので自由に好きなものを食べられる。ビールは相変わらず美味しいし、料理も少し奮発すればマシなものが食べられる。パック旅行は単に食費をケッチつてただけかも。まだまだ疲れがとれないままにホテルに戻りぐったりベットに入った。

七月十五日から十八日の四日間はライプツィヒで過ごすことにしていた。毎日の移動は大変だし、疲れも限界だ。私は早くもバテバテだが、さすがに元気な人でも危険信号が出そう。旅の途中で病気にでもなった大変だ。いろいろなストレスも溜まる。ストレスといえばグループ旅で最も重要なのは協調性だ。二、三日間ぐらいいはなんとか他人とは合わせられるがもつと長期間になると大変だ。人それぞれには個性というものがあり、それは我儘ともなつて出てくる。如何に皆が一つの目標に向かって協調できるか、この旅の課題でもあった。正直、各人それぞれ興味は違う、哲学という共通

のテーマはあるが、その他はバラバラである。女性はやはりいつまでも少女、ローライやゲーテ文学、お城などロマチックを求める。男性は絵画や音楽に興味があり必ずしも全ては合致しない。でもそこは大人の対応。最後の禅セミナーの宗教体験まで一致団結です。

ワイマールからライプツィヒまでは列車で東へ一時間程。もうすつかりドイツ鉄道には慣れました。改札がないのも開放的で快適です。余裕が出てきたので乗客に話しかけました。どうも相手も旅行者みたいです。若い人は大体英語を話します。これもユーロ統合で国境が無くなったせいかも。ライプツィヒ中央駅は大きい、ヨーロッパでも最大級とか。例のドーム式の駅舎のなかには大きなシヨッピングセンターもある。ライプツィヒの中心部はリングという大通り公園でぐるっと囲まれてその中に広場や教会がある。なにを隠そう私はバッハ神様のバッハ・フリークである。もう、一〇年以上、バッハしか歌わないこだわりの合唱団に入っていて、さらに普通の合唱人ではめつたに歌わないバッハの「マタイ受難曲」をはじめとする四大曲を二、三回コンサートで歌っている。バッハを語らせると長くなるが、彼は特別。モーツアルトやベートーヴェンも天才であるがバッハは少し違う。精神性は比較にならない。他の音楽家は音で自然を模倣するが、バッハは世界の精神を音で示す。私は唯一の音楽の哲学者と思っている。

ここに来ただけでも幸せイッパイである。もちろんバッハ以外にも超有名どころがずらりといた芸術の都である。これから四日間もある、たつぷりと浸れるかと考えるだけでも疲れを忘れて興奮してくる。といつてもやはり疲れには勝てない。

早速、ホテルに向かう。全員疲れているのでここでもタクシーに乗った。ホテルはリングの外にあつたが案外近い。四日間お世話になるホテルにチェックインし安心すると、疲れてがまたまたどつと出てきた。七月のドイツは平均気温が二十八度位、そんなに暑くはないがたまには三〇度を越す日もある。直射日光はさすがに堪える。それでも皆はずぐに中心部へ繰り出すとか。私はこれもパス。体調第一にして、ベットに入る。今日もウトウト昼過ぎまで。そろそろお腹が空いた何か食べたいと思つて外にでる。ホテルは街はずれ、レストランごときものは全然ありません。仕方なしに部屋にもどり、例のストック昼食でお腹を膨らませて休息。ふつと目が覚めるともう夕方、他のメンバーが元気に戻ってきている。聞けば、今夜は聖トーマス教会でコンサートがあるそう。私は明日でも単独でゆつくりバッハは堪能したいと思つていたのですが、そこは団体行動。歩いても三〇分くらいでいけるのですが、疲れている私の我儘でタクシーで直行。いきなり憧れの聖トーマス教会。ここはバッハの聖地、一九三三年から五〇年までこ

の教会の音楽監督を務め、その間、音楽の人類遺産であるとまで言われている。「マタイ受難曲」をはじめ、数々の名曲を作つた。そして教会の前には有名なバッハ像がある。感激してバッハとの写真を何枚も撮ってもらう。ふと横をみるとバイオリンをもつた若者がストリート演奏をしている。音を聞くと何か違和感が漂う。モーツアルトの「アイネ・クライネ」である。なんでわざわざバッハゆかりの教会の前で、喧嘩売つてるのか。注意しようと思つたが止めた。国際問題になれば大変だ。教会の中に入ると思つたよりも小さい。ここでバッハが聖歌隊の指揮をして演奏していたのかと思いをめぐらす。教会後部の上には聖歌隊の席、前の祭壇にはバッハのお墓があつた。教会にはよく聖人などの墓のレリーフが室内にあるがバッハのも花輪などがそばにあつた。教会であるが仏式で手を合わす。祈祷席にすわつてしばらく眺めると教会の窓にはバッハ、ルター、メンデルスゾーンのステンドグラスが。コンサートはオルガンだ。どんな有名な指揮者やオーケストラも来日してもらえれば日本で聞ける。しかし、備え付けのオルガンだけはこの場でしか聞くことはできない。貴重な体験である。チケットを教会入り口で再購入して席にすわつた。どうやら演奏者はプロではなくオルガンを勉強中の学生らしいので料金は安い。バッハのオルガン曲を四人で一時間程演奏する。最初の音が響いた。建物全体が震えるくらい低い重低音。身体も、心までも振動す

る。これは利く。完全に音楽に溶け込んでしまふ。バツハの宇宙に漂い帰ってこられなくなりそうになる。一時間、夢見心地で過ぎ去った。一緒に聴いている友人は、バツハ勿論、クラシック音楽も初めての体験。放心状態で圧倒されている。次の時間は演奏者が変わるだけで曲目は同じだった。友人は三回目も聴くという。これほどまで感動したのだろうか、そこまでということだ。教会を出た。夜九時を過ぎていたが、まだ明るいライプツヒのメインアーケードの地下にゲートも学生時代によく通っていたアウアーバツハスケラーという大きなビアホールがある。なんでもここは世界で五番目にランクする有名ビアホールとか。ゲートのファウストを日本語に訳す際、森鴎外もここへ雰囲気を求めてやってきたとか。地下へ降りると、いやー大きい、イメージは日本の”ミュンヘン”だが規模が違う。勿論、ビールも水っぽくなく地元、本場のビールはうまい。料理もザクセン地方の郷土料理。ビールには良く合うのでまあまあ満足。今日はほとんどホテルで寝ていたが締めは最高にハッピーな一日でした。

さて、ライプツヒ二日目、七月十六日。

グループの皆はマイセンに行くとか。うーん、マイセンか磁器ね。もともと日本の伊万里や柿右衛門などにあこがれて十七世紀にやっとならされたもの。当時の中国、日本趣味が反映して世界的に有名になった。なので行かない。ゆっくりラ

イプツヒ音楽めぐり優先。たつぷり一日はあるので一行を見送りゆつくりと出発の準備。さて、どう交通手段でいったらよいものか。タクシーで行っても町全体を歩くのは大変だし、暑いし疲れる。思案しながらホテルの横を見ると自転車が教台止めてある。レンタル自転車だ。これだ、と思いフロントで聞いてみるとやはり借りれる。一回九ユーロ、千円位か、まあまあだ。鍵の番号を覚えてもらい、いざ出発。でもペダル運びが変だ。ドイツの自転車は前に漕ぎ出すと前身するのは日本と同じだが、ペダルを逆に戻すと止まる。日本のはいわゆるフライホイールで、ペダルを止めても自転車はブレーキをかけなければ進み止まらない。ドイツの方が安全だ。なぜこの方式を日本も取り入れないのだろうか。自転車事故は減るかもしれない。などと感心しながら、快適にリングを抜けて中心部へ。途中、ノルウエーの作曲家グリークがすんでいた家が保存されていたので外観だけであるが見学した。さらに世界で最初の市民によるオーケストラを設けたゲヴァントハウスのコンサートホールやニコライ教会、そしてバツハが演奏のため足繁く通った旧市庁舎。ここはいま博物館になっている。その前にお腹が減ってきた。今日はホテルで朝、例のパンなどの拝借をしておかなかったのでレストランを探す。外国へいくと困るのは昼食だ。夜はしっかりレストランがあるが、ランチはサンドイッチや軽食なのか、なかなか適当な店が見つからない。こんな時便利

なのがマクドである。なにせ世界共通メニュー。

日本ではめつたに食べないが、外国に行くときよく利用する。しかしそれも見当たらないのでさらにうろつくと、回転寿司があった。こんなところにも日本式進出か、どうせ、などと思いつつもお腹すいているし面倒なので入った。何皿コースもあつたがめんどくさいのでいわゆる食べ放題コースを勢いで注文。ドイツは内陸部だし魚は全て輸入だろうな。サーモンやマグロも北欧産。久しぶりの日本食なので腹いっぱい食べました。店員には日本人はいなくてドイツ人か外国系の人だけ。お昼を食べ、少し眠くなってきたので隣のインフォメーションセンターで少し昼寝して、先ほどの旧市庁舎博物館へ。ここはドイツの歴史の展示館。ドイツ民族はゲルマン系からだと思っていたが、スラブ系など北方の影響も受けてなど古代の資料が展示してあつた。外国の都市を訪れると一番そこをよく理解できるのは観光センターよりも博物館かもしれない。実物の資料により本当のことが理解できる。

自転車で巡っているので軽快そのもの、どこでも自由に行けます。で、またまた聖トーマス教会へ。バツハ像とも二度目の対面。もうすっかりと馴染みになりました。また、教会にはいりましたが今日のお目当てはすぐ隣のこれも期待のバツハ博物館。バツハ・ミュージアム。おお、貴重なバツハ自筆の楽譜がずらり。

バツハ研究者では有名であるが、「マタイ受難曲」オリジナル楽譜には十字架の形が音符の配置で現れている。バツハにはこのほか様々な音楽的な仕組みが密かに楽譜に隠されているのだが、彼が音以外にも精神を楽譜に閉じ込めたという事実はまた特別な芸術の域を形作つたというとも言える。などなどバツハに関する蘊蓄を語りだすと止まらないのでここで留め置き次へ。ミュージアムを出てバツハ像がある教会の入り口を左手にぐるりと行くと教会の正面入り口になる。ここが本来の教会出入り口。その前に公園があり、左手にこれも有名なメンデルスゾーン銅像があつた。メンデルスゾーンは勿論自身も高名な作曲家であるが、長い間忘れ去られていたバツハのマタイ受難曲をはじめとする宗教曲を復活したことで有名で、そのためここに銅像が建てられてある。一緒に写真をとつてもらおうと通りかかるとご夫婦に頼んだ。あちらも旅行者らしかったので、何処から来たのかと尋ねると、ノルウエーからという。おお、さつき貴方の国の作曲家グリークの家を見てきたと言うと。君は日本の作曲家かと聞き返してきた。どうも、グリークは自国の人であるが、世界的に有名であることをあまり知らないらしい。”ペールギュント”はファンタスティックだというと、感激して握手を求めてきた。もつと自慢してよいのにな。謙虚な人だ。こんなすがすがしい出会いでライプツヒ独り占めの二日目は終わった。大々満足でドイツ式チャリンコでホ

テルへ帰り、寝る。

三日目の十七日はプロテスタント教会の始祖マルティン・ルターの有名な「九十五か条の論題」が掲示された所と哲学者ニーチェの生家を見に行く計画。私はもう少しこのライプツィヒでゆっくりしたいと思っていたが、せつかくの機会、午前中のルターくらいまではと考え、皆と一緒に朝早くライプツィヒの駅にむかった。件の教会はライプツィヒから北へICEで三〇分位、ちようと、パツクツアー最初に行ったベルリン、ポツダムとこととの中間位に位置する。ヴィッテンベルクと言うその町は想像以上に小さな田舎町でした。駅を降りても周りには何もない。お花畑が広がっていました。地図を頼りに、とぼとぼ歩いて行くとルター・ホールという名称を掲げた修道院らしき建物にたどり着きます。ここはルター家族が住居として使っていたものらしいのですが、ずいぶん大きく豪華。中にはルター博物館になっています。貴重なものも沢山ありました。面白いのは例の免罪符を売って集めたお金を保管する箱とそれに対して抗議の募金を集めた箱同じ箱でも対照的な展示物です。そして問題の九十五か条の公開質問状などなど。しかし、だんだんと展示物を見るに従いながら異質なものを感じるようになってきました。美しい修道女との結婚。お気に入りの中のビールジョッキ。晩年のずいぶん太った肖像画。ドイツ人だからビール大好き、ついでに女も好き。これじゃ一

般人と同じじゃないですか。否、ルターは古い権威を否定したのだ、これだ。何か腑に落ちないものを残したまま。雨の少し降り出した通りにでて街はずれの城付属聖堂へ。「九十五ヶ条の論題」が扉に貼られたことで知られる大学付属聖堂とも呼ばれる教会堂は少し豪華な建物でした。この豪華さが気に入らなくてご意見を掲げたのですから、納得、一五七七年の事です。宗教改革のきっかけ、世界史の試験には必ず出ます。

語呂合せ、宗教改革、以後一難。実際には一難でなく、一五二四年の農民戦争から一六四八年にヴェストバールン条約でやっと終了した三十年戦争まで一〇〇年以上に渡りヨーロッパを殺戮の渦に巻き込んだ恐ろしい宗教戦争の発端です。今だ小雨の静かな田舎町、再び私たちは駅を目指して濡れた石畳を歩いた。もう、正午をとくに過ぎていく。例によってホテル調達の昼食を駅前で済ませて、皆はニーチェの生家に向かうとか。行きたい気がするが、身体の疲れはまだ残っている。旅行は続くので大事をとって私はライプツィヒに戻ることに。ニーチェの生家はライプツィヒから南へ各停で三〇分ヴアイセンフェルス駅からタクシードで二〇分位のレツケンという田舎町にあるのだとか。もう、昼二時を過ぎていくし閉館に間に合うか、少し心配であった。私はライプツィヒの駅でお別れして、ゆつくりと歩いてホテルに戻った。途中はリングの中心の道を通って帰ったので昨日自転車であつた道をまた見て

いることになる。ずいぶんとこの町にも慣れてきた。夕食は面倒なのでサンドイッチを買って、ホテルでゆつくり食べた。この時、日本から持ってきたインスタント味噌汁のうまかったこと。とくに「しじみ」は最高。この味はヨーロッパ人には分かるまい。夕方遅くに皆が戻ってきた、閉館時間を過ぎていたが係りの人が親切に開けて案内してくれたとか、はるばる日本から来たのでよかった、よかった。

次の日一八日はいよいよライプツィヒ四日目最終日。さすがに皆も休養することにして自由行動日に。私はと言うと結構休養が取れたので、がんばって本日は残りの音楽家ツアーへ。例によってレンタル自転車を借りて、まずメンデルスゾーンの家へ。一八四五年から二年間実際に暮らした住居で、すぐ近くのゲヴァントハウス管弦楽団の楽長として勤めたのです。ライプツィヒ音楽院を設立しバッハを再発見とともにドイツ音楽に多大な貢献をした偉人。沢山の音楽関係の展示物があり堪能しました。そしてもう昼になったので丁度、ハウスの中庭にベンチがあつたのでそこで例のホテル調ラントチを頂いた。爽やかな緑と心地よいそよ風、うとうと昼寝を少しの時間を過ぎます。メンデルスゾーンハウスはリングの少し外側にあるので、自転車でリングの道路を渡って三たびの街中に出た。もうすっかり見慣れた町並み、余裕でペダルを漕ぎ、またまた聖トーマス教会へ。

何回行くんや。近くにドイツで初めて開店したコーヒーハウスがあるとかでそこを尋ねる。カフェバウムという名前のお店。一杯飲んでみたい気もしたが人が沢山いたので見るだけ。音楽ツアーを続ける。街中から東へ再びリングを外へ次のお目当はワグナーである。ワグナーは一八一三年にここライプツィヒに生まれているが、不思議なことにあまり記念碑的なものがない。生家跡もショッピングセンターの店のドアに表示してある程度で、小さなモニュメントがここリングの外の公園にあるくらいである。バッハに遠慮して、バイロイトに譲ったのか。さて、音楽旅の最後はシューマン。一八四〇年に駆け落ちしたクララとここではじめて四年間暮らしました。ここはピアニスト、クララが子供達にピアノを教えていたという経緯もあるのか隣は小学校になっていました。ライプツィヒの中心から自転車で二〇分位小高い丘の上の静かな家でした。

さて、四日間のドイツ音楽を満喫できたライプツィヒの町。最後の夜は、珍しくホテルで夕食を。案外ホテルのデイナーも安くて美味しい。寝床が近いので安心してビールも飲める。皆と旅の感想などをワイワイ話しながら名残惜しい夜を遅くまで過ごしました。

さて次回、一九日からはいよいよタイトル通りの哲学の旅本番。お楽しみに。体力も気力も回復し筆もますます冴えてきます。

梵店主

普通の人なら十五分ぐらいで登る四〇

〇段の階段を、よつちゃんは一時間もかかってしまった。幾度も休み、途中で引き返そうと思いつつも、熊さんの手前なんとか登った。その山は栃尾山二七四メートルであった。栃尾山から横尾山三一二メートルまではわりと平坦な尾根が続くが、その先に須磨アルプス馬の背と呼ばれる個所があった。よつちゃんは、馬の背を初めて見て、なるほど北アルプスの稜線にあるような岩稜だなど感じた。そこだけは木もなく岩ばかりの尾根になっている。道の両側は崖になっていて強風にあえばバランスを崩し落ちる。ほんのわずかな距離だがすこ味を感じた。

なんとか馬の背を歩き東山二五三メートルまで来た。もう限界だとよつちゃんは思っていたら、熊さんが「妙法寺へ下りよか」と言ってくれた。よつちゃんは、二つ返事で下りようと言った。下りるとなれば元気が出てくる。地下鉄西神・山手線の妙法寺駅を目指した。

かなり疲れていたが、いつもの癖で「三宮で一杯よろか」と熊さんに声をかける。熊さんも快諾してくれた。居酒屋で一杯やりながら、思ったより歩けたなあ、と熊さんは褒めてくれる。よつちゃんも、少し自信が出てきた。普通の人より何倍も時間がかかったが、とにかく歩けたの

である。その有り難さをよつちゃんは酒を飲みながら感じ取っていた。熊さんは、明後日の愛宕山も何とか行けるやろ、と及第点をくれた。

もう山は登れないだろうと諦めていたよつちゃんは、少しの距離だが六甲山を歩けたことで、ひよつとしたら昔のように山登りができるかもしれないと希望がわいてきた。この調子で明後日、一月二日の愛宕山に登ろうと決心したのである。

正月の二日、朝早く起きて電車に乗り待ち合わせの保津峡駅に降りた。幸運にも天気がよく雪も無くてほつとした。念のために昔のアイゼンをザックの中に入れてきたが必要なさそうである。熊さんと大江君も、間もなくきて三人で登り出した。よつちゃんは、初めての愛宕山ではたして登れるのか心配であったが、二人が付いていてくれるから何とかなるだろうと樂觀していた。

熊さんがよつちゃんの為に選んでくれたルートは、保津峡から尾根に取りつくなだらかな尾根であった。愛宕山にもいくつかのルートがある中で最も傾斜が緩いルートである。

六甲に登ったおかげか、遅れながらもなんとか歩いて愛宕神社にたどり着いた。休憩所で熊さんが所属する山の会の人たちに雑煮や餅を振る舞っていただき有り難くいただく。下山後、京都駅前の居酒屋で打ち上げをした。その時に、熊さんが三月に行われる六甲全山縦走に参加す

という話をしたので、よつちゃんも興味があったが、なんぼどうでも今の体力では無理だから、次の年には参加できるように頑張ろうと思った。代わりに大江君に参加をすすめたら、彼も興味があったのか参加すると言う。

よつちゃんが、運動することを決心したのは、その時だった。一年後の六甲全山縦走に何とか出て完走したい。五十六キロを十五時間で歩きたい。これまで何となくリハビリを続けていたよつちゃんに新たな目標が出来たのである。今のままでは、とても五十六キロを歩くことは出来ない。体重も一〇〇キロ近いし、足腰もすぐに痛くなる。しゃがむと立ち上がれない。目はすぐに充血するし、夜もよく寝られない。このままではロクなことにならないと考えていたが、どうしていいのかわからなかった。そんなよつちゃんは、六甲全山縦走というかなり高いハードルを設定しトレーニングに集中することで不安な気持ちを消し去ろうとしたのである。



連載「おっちょこちょいぼけ」(41)  
——昭和女、どっこい日記——

連載

夏の終わりはかいだるい…の巻

「かいだるい」という日本語、あるんだらうか。「かったるい」ではなくて、全身の血の三分の一ぐらいをドラキュラに吸われたような。さらに、ドラキュラに襲われる前の前日に、炎天下の運動場を何周も走らされたような。トシ取ると、疲れや痛みはすぐには出ないのだ。

こんなことを書いたら、各方面から反論されるとは思う。ドラキュラは若い美女しか襲わない、いくら、血に飢えていてもチンケな大阪のオバハン(それも後期オバハン)は襲わんやろ、と。だから、これはたとえ話である。全身の血が減ってしまったような感覚を「大量の蚊に血を吸われたような」と書いても、「そりや痒そうだ!」というところに思いがいつてしまつて、「かいだるき」をわかつてもらえないだろうから。

そんなわけで(どんなわけでしよう?)、ドラキュラに血を吸われて、ぐったりした私は、この数日の自分の行動を思い起こす。

腕が重い。原稿の書き過ぎ? 違う。エイジロウだ、エイジロウが重かったのだ。

エイジロウは仕事仲間のカオリちゃんの子供で保育園児。いつものように、保育園にお迎えに行くため、みんなより早

く帰ったカオリちゃんがひよっこり会社に戻ってきた。「スマホ、忘れましたあ」と言いながら。その横に、可愛い男の子。それがエイジロウ。会社の食事会などに連れて来てくれるので、初対面ではないが、子供の成長は早い。半年も会わないと、想定の外に大きくなってきている。とくに、お相撲さん体型のエイジロウくんはデカく重くなっていた。それをうっかり抱いてしまった。

お母さんの仕事場で、かたくなっていたエイジロウくんは抱かれたくもなかった。怒りもしなかった。「オカさんが世話になってるかもしれん。ここは機嫌ようしとこう」と考えるほどには成長してないので、そこが可愛い。

成長していたら、こちらも言わねばならなかっただろう。「いや、しっかり者のカオリちゃんに世話になっているのは私の方なんです」。

抱っこといってもたったの十五分ほどなのだ。だのに、二日も経って、何だか腕が重いような、だるいような……。我ながら、やわ過ぎである。こんなことで、孫の世話ができるか！ と言いたいが、いないんだ。孫、というより、その前提となる子供が。

エイジロウが来た日の前の日、仕事が終わって、親友F子の従兄弟F男さんとその友だちと夕方、食事に行った。F男さんとの食事は半年前からのびのびになつていたので、やっと集まれたのだ。F男さんは胸に大きな病いを抱え、癌ではないが、片肺になり、喉には呼吸を助

けるための穴が開いていて、そこにチューブが差し込まれている。見たことはないが、胸の横の方には空洞部分がある、という。

その状態では病院のベッドで寝ているしかないのでは、と思うが、退院して、ヘルパーさんの助けを借りながら生活をしている。もともと痩せ気味の体がさらに痩せて、飲むのは熱いお茶だけ。そのレストランがいいと指定したのはF男さんだが、フレンチなので「あいにく熱いお茶のご用意はないので、ウーロン茶を沸かしましょうか」と言ってもらって、それを飲んでいた。

「僕も気分転換しないとね」と言っていたが、やはりしんどそう。

そして、話題が「病院で、肺から水を抜いてもらう処置がどんなに痛かったか」。普段なら太い針を刺す前に麻酔をするのだそうだが、日曜日で麻酔医がいな。「気の毒やけど、麻酔なしでやっていかか？」と聞いてくれたそうで、患者のことをよく考えてくれる良い先生のようにだが、麻酔なしで、いまだき考えられない。私なら、「げ、月曜を待ちます」と答えるが、水がたまるといふ状態は相当に苦しいらしく、「痛いのはいつときやけど、苦しいのはたまらんからね」と「お願いします」とF男さんは承諾した。そして始まった処置。「そおら痛かったでえ」と講談師のように「ぐわっ」と目を剥いたり、「うううう」と顔をしかめたりしながら臨場感たっぷり話してくれるので、聞いている方は血の気が引く。

思えば、あの日、ドラキュラに血を吸われたような気がする。しかし、病院で痛い目にあつた話などは、それが他人事（すみません、F男さん）である限り、結構、面白く聞けるのだが、

食事でもそろそろ終わるころになって「だから、僕に何があつても驚かないでほしい。それから、この際やから、言うておくけど僕は子供もないし、密葬だけですませるつもりやから」とか、「僕はずっと生きづらさを感じながら生きてきた。あまり、この世に未練はないんや」などと言われると、切なくて、どうしていいのかわからなくて、息苦しいような気持ちになつてしまふ。「いや、（死ぬ）順番なんてわからないですよ。私たちだって同じです」と目を伏せながら、わざと軽く受け流しても、気持ちはずんずん重くなる。

それでも、翌日、仕事をしていれば、そちらに気を取られるが、ときどき重い気持ちがおり返す。朝はゆっくり寝ているだろうと午後になるのを待つてF男さんに電話してみたら、「体調、悪くない。逆に元気出た！ 今度は少し酒が飲めるようになっておから」と本当に元気そうなの声だったので、かなり安心はしたが、それでも引いた血液が半分ぐらいいしか戻つてこない。

一緒に行ったT子も心配でF男さんに電話をしたらしく、「元気そうだった」と夜、私に連絡をくれた。そして「ショックだったけど、まあ、大丈夫じゃないかな」と二人で「F男さんは大丈夫、（あの

世にいくのは私の方が先かもしれん」と言い合つた。

仕事で知り合つたり、F男さんのように親友の従兄弟だったりという理由で、たまに食事をしたり会話をするだけのつきあいでも、「共に生きてきた仲間」。自分も含めて、「いつかはこの世にオサラバする」という覚悟が決まらなまま、「あああ、かいだるい」と朝の歯磨きをしている私。

それでも、やることはしなくてはいけない。九十歳になつた母の安否確認兼きげん伺いの電話をする。

「あ！ お母さんね、これからライフ行くから。何か用？」用はないけど、こんな暑いとき、なにもライフに行かなくても……「バスで行くから。じゃあね」ガチヤン。人は皆、等しく死の淵にいる。母など、最も淵際だと思ふが、この元気さ。私も「ドラキュラに血を吸われたかも」などとたわけたことを言つてないで元気出そう。またエイジロウくんを抱っこさせてもらつて腕も鍛えよう。あの子はほとんど重くなるから、中学生ぐらいいまで毎日抱かせてもらつたら、西区民運動会ウエイトリフティング・シニアの部に出場できるかもしれない。ま、実際は来年にはもう抱かせてもらえないだろうが。四歳になるんだもんね。

(AO)

## 父のシベリア俘虜記

### 「流転八十年」(5)

若山 哲郎

安倍首相は、この九月四日から中国杭州G20サミットの前にウラジオストクで開かれた東方経済サミットでプーチン大統領と十二月来日要請を再確認した。懸案の来日要請はウクライナ問題やドーピング問題などロシアに対する国際的非難により何度も計画が延期になったが、ここに来てやっと実現することになりそうである。両国最大級の懸案議題はもちろん北方領土問題である。四島一括返還かそれとも歯舞、色丹の二島か。一九五六年の日ソ共同宣言はこの領土問題を引き続きの交渉事項として批准されたが、ソビエト連邦崩壊後、ロシアはこの問題をどういうスタンスを取るのかという注目がされる。というのはこの問題は日本とロシアとの国境問題ではなく第二次世界大戦の戦後処理に属するものだからである。周知のように当時、日本は米、英を中心とする連合国と戦争をしていたわけである。ソビエトとは不可侵条約を結んでいたが、終戦直前、ソビエトはこれを一方的に破棄して攻め込んできた。そしてポツダム宣言を解釈しその国土を拡大したのである。ここまでは戦後の処理として進んでいたが、問題が複雑になったのは、ソビエトが共産主義国として西側自由主義陣営

と対立を深めていったことである。いわゆる、冷戦構造である。日ソの領土問題の背景にはアメリカの意向が働いていると言われている。六〇年前の日ソ共同宣言では二島返還で合意していたのだが、当時、日本とソ連の接近を嫌ったアメリカが沖繩の返還延期を盾にし「恫喝」してきたという話もある。原爆投下も冷戦を予期した判断でもあった。このように歴史的事実の裏側にはまだまだ真実が多く隠されている。

このシベリア抑留も同じような国際政治バランスの犠牲的事例であろう。一人の人間の一生が歴史の中で翻弄されるのである。さて、帰国の道を閉ざされ絶望を乗せたシベリア鉄道をひたすら西に走る父を乗せた列車はある駅に停車した。ここからはなお過酷な本当のシベリアの始まりである。

### 流転八十年 本編より

#### 何の準備もない収容所

いよいよ下車と決定した限りこの近くで労働に従事して俘虜として働くのだ。霧の深い鉄道の近くで炊事を終る。近くの沼の水で水浴でもと思つて足を入れると、水は既に身を切るように貨車の蒸せる熱気に酔った兵隊の体に冷氣はしみて来る九月というのにこの寒さだ、先が思いやられるぞと自分自分に呼びかけるの

だった。

私は鉄路が引込み線になって広場に終る辺に工場が姿を見せ人が働いていることを知った。松の木が青い葉を並べているその青い色と松をつくづく見てこう思つたのだ、この高い松が裸で育つ限り極寒の中で生きていく以上人間だつてここで生きられるに違いないと信じて嬉し涙を止めることはできなかった。

松さえ生きて、人が生きられぬことはない、変な推理かも知れないけれどもんなことに涙を見る私の姿もあわれだ。生きられるんだ、生きられるんだと心の中で叫んだ。零下五十度という冷気がどんなものか生まれて一度だつて経験したことのない私たちだ。

この工場には鎌と星とハンマーのソビエトの国章が大きく門に張りつけられて工場内はがらんとした空屋同様何の設備もなく、戦車のキャタピラや機関車が雨ざらしになって茶色に変わつて戦争の跡をさらしていた。

やがて兵隊、将校全員の服装検査をソ連側が厳重に行い始めた。兵隊はタオル二枚、靴下二足と制限した他は総べて帰国まで預るといふ、将校は行李一個、他は悉く没収した。不思議なことに時計、万年筆、カメラ、洗面具の類に至るまで掠奪だ、強奪だ。盗賊行為である。

俘虜規定に照らしても大違反だらけ、将校も刀を勿論預りということでも帰国までの名目で引揚げられる。これからは必需品はソ連が支給するという足りても足りなくても兵は誰も我慢せざるを得ないことになる。将来何も食べものが無くなることがあるかも知れない時でも、兵たちは何もかもソ連兵にさらわれてしまったのだ。命を守るものが何もないということは淋しいよりももっと悲しいことでもあった。

生か死かを左右する日が遠い先でなくて、つい足元に迫つて来たことを私たちは知つたのだ。

迫り来た第一年目の冬の寒気が私たちに仲間に襲いかかった。

虚弱な者、そして又丈夫でない者、更に強健な者の中の幾割かが不慮の出来方で葬り去られ死滅していった。運のあつた人々だけが苦しみの中に淘汰され、かろうじて冬を越すことができたのであつた。

#### ロシアの実態

一方的に自国の偉大なことばかりを誇張して聞かされていたであろうロシア人は、その軍隊が満州に足一歩踏み入れると、戦力だけでは見られない文明を持つた日本が隣にいたことに半ば驚いたことでもあつたらう。

それは食糧も被服も持つて入ソした俘

虜、こんな種族が何処の世界にあつたらうか。それにその兵隊俘虜はおだてあげたら意気に感じて倒れるまでその個人個人の労働力を必死で高めていくお人よしでもあつた。

### 一カ月ぶりの入浴

世にも稀な収容所の厳格きわまる検査の翌日、本当に一カ月ぶりで一番楽しい入浴にありついた。五十名が一隊となつて収容所を出て鉄路に沿つて四、五軒ばかり行くと町はずれに日本の銭湯みたいな共同浴場があつた。その浴場に隣り合つた部屋で脱衣し勿論身ぐるみ靴から帽子に至るまで上衣に包み込み上をバンブで監視の警戒兵と入浴場のロシヤ人

「女だ、女だ」と言う声が入浴を待つ私たちに目を見張らせた。もうもう立つ湯気の煙の中に見る目もたくましい女の裸のままの肉体あふれる健康美に輝く肉体だ。私たちはその光景に圧倒される。皮膚の色は淡桃色、髪の色も私たち人種と全く異なる国の女の裸の姿に魅せられたのだ。女という存在を忘れてしまつて

いる私たちは蘇生の思いを抱くのがつた。けれどそれはただの瞬間に過ぎなかつた。夕闇の迫る頃であつた。

風呂では勿論なくシャワーの大型のものだが、室内は蒸気でむせ返る気持よさはその例えようはない程であつた。しかしその後は大変で大騒ぎが持ち上がった。バンドが無い、シャツが無い、悉く盗難にかかつていない者はない。裸同様で帰らなくてはならない者、言つて行く処もなく、申出たところで何にもならない。全くこれは命がけの入浴と言わねばならなかつた。

五十人が四回に分かれての入浴だから全員が終るまで待つのだ、勝手な行動でこの場を離れる者は自動小銃でお見舞いだと威すのだ。こんな無一物の国、誰が逃亡する者があるかと思議な程に思えた。が俘虜の逃亡を極度に恐れているらしい。もしソ連の監視兵が逃亡者でも出そうものなら位階を降等される程の刑に処せられるのだ。この入浴場の付属に理髪屋がある。古い鏡が一つに石ケン箱の中に洗濯石ケン一個入れてあつた。鏡の上の額縁の中に背広姿のスターリンが愛らしい少女を抱いて立っている。これも『どん底』に出てくるようなひげの深い床屋さんが貧乏人によくある人のよい笑顔で『スターリンを知っているか』と言ふ。兵隊たちがうなづく嬉しうに笑う。

『ミカドいるか』とその女房らしいのが客のひげをあたりながら初めて見る日本兵に話しかける。言葉の通じない日本兵

に身振り手振りで話し合い声を立てて笑いさざめく。

私は彼らの笑いの中から読みとることの出来るのは、シベリヤの空は冬期にありがちな暗雲低迷していても、この下に住む人々は決して暗い人ではなく温い人のように思える。

誰もがその裏で又一度も戦つたことのない日本兵に気の毒だという感情を持ち合せて、ドイツ軍に対する感情とは全く異つたものであつた。

全く暗くなつた鉄路の町をソ連警戒兵に追われるように収容所に帰つていった。

### 俘虜第一課

その翌日から収容所の外柵を作る組と製粉工場、罐詰工場に働きにいく組に分けられた。それから数日の間はこの割り振りで日傭いとなつて労働するのだが賃金のない労務である。私たちが現在こんな土地に来てこんな日を送るといふことは想像さえ出来ないことだつた。

罐詰工場は牛の生皮の塩漬用として使用する工業塩が工場の引込線に入つて来ると、鉄路のすぐ下の倉庫の中に落とす込むのが吾々兵隊の仕事でスコップを振うのも監視付きのソ連兵のことだし決して楽ではなかつたが、割合のんきでロシヤ人労働者は女がほとんどだが珍しがつて自分のものでもない罐詰を遠慮なく

気前よく吾々に振舞うのだつた。

又一方の組の吾々仲間は収容所の外柵が鉄線で一通り出来る頃は本格的な森林伐採作業班と炭坑採掘班に別れ労働が実施されるといふうわさで、日本に送還などの話題は消えてしまつても誰もが諦めてしまわねばならなかつた。

私たちは自分達が収容される家の外柵を自分達で造る矛盾を毎日繰返し、この国の人達の心を知ることが到底出来ないことだつた。

一重の鉄線柵が幾条も幾条も張り巡らされて身の丈以上になり、それが三重になり四重になり鉄線に添つて電流が通じ五十メートル置きに高い物見櫓が出来上り歩哨が監視の自動小銃で立ち始めて間もない頃あのうわさが実現する時がやつて来た。

技術を持つ人とそうでない人と言つた大まかな分類が行われ、銀行家も学者も商人も一山という口で山の森林伐採場に向つて出発することになつた。

### 死の作業場行き

技術者を残した私たちは鉄路の収容所を後に別の山の伐採場に一〇〇〇名の大隊で出発した。逃亡する意志の微塵もない私たちの列の前後両側を監視兵が厳重警戒しながら、背に背囊と毛布外套を負つて、私たちの行軍は幾日も続けられ

た。夜は一枚の毛布に身を包み皆が固まり合つて迫つて来る寒氣と闘つた。九月末のシベリヤの夜は到底外で過ごすことなどは不可能なことだった。眠つたと思つたら寒さのため目が覚める、こんな夜の連続、起きたと思つたら重い背囊を背負つて歩く。少量の米や雑穀が死なない程度に軍から渡され、しまいには一日一食の粟の雑穀より配給しない。飢えと疲れは一日一日と深刻に身を襲い活力をそいで来る。冷めたい寒空の下で寒氣と闘う疲労の極の私たち、眠れぬ夜の連続、如何に困苦欠乏に堪えて戦場に数年生き残りの兵隊もこの連日連夜の死の行軍の猛攻に一人二人と倒れていった。倒れた兵を追いまくるソ連警戒兵たち、食べさえすればこの行軍くらいと思つても一日一食粟飯では、機械でない以上何れ私も倒れるに違いないと思う。どうしてやることも出来ない友を心の中で思つて進む。

ただ生きる為の死の行軍を続けた私たちが鉄路の収容所を出発して九日目に流刑になった囚人の住んでいたという山の刑務所の高い望楼のある収容所に辿り着くことが出来た。

### 山の収容所で見る月

嘗ての囚人刑務所が私たちの常宿で外柵は粗末な丸木の隙間なく立並びその上は有刺鉄線が張り巡らせている。この建物の付近は伐り取られた松の切り株が積上げられているだけだったが、見れば松

の森林は何年伐つても到底伐り尽せぬ程の大森林が地球の果まで続いていると見られた。

遂に私たちは落ち着くべき場所に到着したようだ。全く人里離れたシベリヤの山奥で昨日まで働いていた囚人に代つて、その手斧と鋸切りで千古の大森林に伐採作業を開始した。それは死がまといつたものでもあつたのだ。その頃は誰いともなく一年間の労役らしいことが絶望の声のように私達の耳に伝えられて来た。

これからの長い一年を待つ間に骨になつてしまふに違いない。その上一年たつて帰れるものか二年になるものか知つてゐる者は誰もないし、唯話題にしては慰め合うに過ぎなかつたのだ。この私たちの兵舎となつた丸木の積立の枠造りの建物は丸木の枠を重ね合わせその隙間に苔を詰め込んで、天井も同様横にいくつも丸木を並べ同じように苔で隙間を防いだ。その上の屋根は土がのせられ屋根はあつたり無かつたりの原始風な建物の中で私たちの生活が始まつている。屋根は雨が一年にほんの僅かだしその必要もなかつた。大切なことは一センチミリの隙間もあつてはならなかつた。それは死の寒氣から人を守らねばならないからだつた。居室は三等船室みたいに二段ベッドに仕切り、上段は立ち上ることは出来ない程の低さで薄暗い部屋が私たちの住家となつたが、あの死の行軍を越えて来た私

たちは住める家を与えられたということだけで心休まるのだつた。

どんな牢獄であろうと。夜ともなればシベリヤの地の果に月が上つた。うらぶれ果てた俘虜の一人として異境の月を仰ごうとは誰が想像したことか、けれど幽遠の月光はこうこうと、支え所のない私たちの心を慰めてくれた。

人間が如何に力付けてくれようと慰めてくれようと現在の私たちは何の頼りになるものでもなかつた。じんと心の底迄しみ渡る郷愁と生命への執着に月は語らぬ深い愛情の光を与えてくれる。ただこの収容所に宿る月光だけが私たちの運命の道筋を何処迄も照らし見守つてくれるのだつた。

### 冲天に光る北極星

冷めたい夜空に星が輝く。探しても見当らなかつた北極星が、見よ。頭上に一点光を投げているではないか。思えば私たちは北の果に流れついたことだろう。ついこの二、三方月前に南中国ハノイの空から低く北極星を眺めていたのに。

収容所に私たちの食べる米がもう無くなつてしまつたのか配給されるものは大豆に代つた。乾燥野菜もなくなつた。

私はある日風邪の高熱で倒れ仮病室に臥せていた時、外で私の仲間や部下達が激しい労働と飢えに疲れ切っていた。

日が経つにつれてソ連上司の要求する仕事の量は激しくなり、食糧は一日一日減少していく一方のようだったが、それにつれて倒れ行く日本兵は日一日増加していった。

私のベッドの横にはもう沢山の発熱や青白くもう一口もしゃべる氣力さえ失つた兵が続々と入室し、山で一度倒れたらそのまま起き上れない患者はもう普通の人でなく、栄養失調で命を尽きる間際まで辿りついた亡霊のようなものだったのだ。担ぎ込まれたベッドの上が最期の場所だった。

このように山の収容所で果てる兵隊はもう戦争が終つたのに帰りつくまでに消えていく哀れな魂は、父も母も、妻も子もその死場所さえも伝わるよすがもなく悲しい運命の人達であつた。さびしさも悲しさも味わう力をも忘れ果て、疲れ切つて絶え入るように地球の果てに去っていくのだ。

時々戦友たちが私の病の床を見舞つてくれるが彼の顔も疲れ瘦せ細つて生氣は見られない。話すことと言えば腹一ぱい食べてみたい、何時の日にも日本に帰国できるとさうか、もう将校も兵も何もなく一片の馬鈴薯の端を目にひく鬼畜に近い悲しい境遇に陥し入れられた。

労働力を上げよとソ連労働係は圧力をかけて食べさせもせず、個人個人の労働

ノルマを上げることばかりにやつきとなつたソ連側だが、それに対し力尽き氣力を欠いた日本兵はもう意地でも打たれ蹴られようと問題ではなくなつた。普通に食糧を与え、おだて上げれば全力を出し切るお人好しの日本兵もこの裏目の仕打ちに山の收容所で漸次死に絶えていくのだろうか。

ただこの收容所には女軍医が一人朝早くから倒れいく日本兵の守護神の役にあつた。あくまでも医師として忠実に健康保護の精神は貫いているのである。彼女が練兵体と認めたらソ連人はそれを守らねばならない。今日は休業だと診断する彼女にソ連作業掛将校が抗議し躍起となつて口論を始めるが、女医は決して自分の処置を変更したことはなかつた。ソ連警戒兵は労働可能の日本兵が半数に減つた私たちの仲間を山の伐採場に毎朝狩り立てていくのだけれど、この働ける仲間も女医に引留められ休業許可を認められた門の内側の病兵と何も変わったことのない腹がへり切つた痩せ細つた栄養失調の人たちばかりであつた。

私たちが食糧に困り切つた時分はロシヤ人の食糧危機は同じように全国を襲つていたので。黒パンの配給は一日六百瓦で殆んどがジャガイモをふかして常食としてしていることを外柵より出て働いている日本兵も話していた。ドイツとの戦争の痛手は如何に深く根強く彦透しているこ

とか、あの列車の中で笑いながら捨てた黒パンが一切れでもあつたらとあの日のことが思い出されるのだ。

ソ連でさえこんな状態である。敗戦日本の祖国の人々の生活は一体どんなものかと思えば心が痛むばかりだつた。

今日も又外で働いている日本兵が持ち込んだ話だ。この近所に住んでいる中国人に出会つた彼は、十月革命の頃ソ連領に連れて来られ、今日はロシヤ女を女房に子供二人いることや、懐しい中国には永久に帰れないことを淋しそうに話していたという。

又 日露戦争中日本の俘虜となつて高松の收容所に入れられ毎日仕事らしい仕事もしなかつたこと、それに引換え今の日本兵のお前達、戦争もしていないのにこき使われて痩せ細つた体を見ると何とも言えぬと言いながら体をなげ廻して大きい涙をぼろりと落とした。そして「日本人よ、どつきり食べてくれ」とバケツいっぱい のジャガイモのふかしたのをくれたと言ふのだった。

私も病が回復したらその日から将校と言えども働かねばならない身だ。例え回復しなくても命令があれば働かねばならね俘虜の身だ。私は時々部屋の中を歩いてはベッドにつかまり立上り歩く練習に余念なかつたが、どうしてそれは不可能だつた。

私は満州奉天で決心したことは一日も忘れたことはない。それは必ずロシヤ語の必要なこと、あのロシヤ語辞典を離しはしなかつた。単語や文法に至るまで人知れず努力を払つて必死になつて筆写しながら記憶を続けて一年が来る。高熱の続く三週間、夢の間も忘れてはいなかつた。

ソ連兵にも、ソ連人にも又日本の仲間にも秘しての執念の連続だつた。今はもうロシヤ語の日常語は不自由はしない。ブラウダやイズベックの新聞は専門学方面は別だが三面記事の社会学方面は読みこなすことは十分の素養はついていた。

高熱はまだ続くある日收容所長が吾々の病室を訪れた女医としきりに何か話し合っている。私のベッドに立寄つた。夢現の中にいる私は「どこが悪い？」と付き添う看護婦の一人に聞くと「全くありません。ただ歩くことができないのです。熱が下がらないのです」彼女はびっくりして「あなたはロシヤ語話せるの？」  
「少々」夢から覚めた私は突然出た自分の言葉に驚いた。女医は顔を綻ばして「きれいです。よく判ります」私はてれくさそうに笑うより仕方がない。自分で体温計をとると三十八度八分と小さい声で言つた。

「毎日この時刻にはこの位の熱が出るのです」後で薬を届けましょう」笑顔のままで去っていく所長や看護婦達はきよと

んとして私の顔を見ていた。

この部屋には毎日新しい患者が五名から十名と入院して来る。余分のベッドは尚余りがあるというのは毎日入院患者の数よりも多いベッドが不要になつていつたからだ。

昏睡状態に陥つた日本兵と断末の苦しみに悶える者の声でまるで地獄であつた。四十度の悪夢の中で私が聞くのは母や子を求める仲間の声、それが朝になるとその主のいたベッドはもう影も無い。

この魔の收容所と死の病院で数カ月後には日本人の悉くは絶えてしまふに違いない。

この病室で与えられる食料は米の粥であつた。久しぶりの米に珍しさの余り目を見張つたけれど、高熱の私の喉は受け付けなかつた。

女医の名はラピナーと言つてまじめな性質であつたがロシヤ人らしくない神経質な所があつた。階級は陸軍中尉、技術は幼稚とも思え、専門的なことを知らぬ私たちがさえ驚く程で、凍傷とか盲腸炎とかの簡単な手術でさえ日本の軍医に任せ切つていた。ただ「熱心さ」だけは尊敬せずにはいられなかつた。それは医者として病人を守るといふあの信仰のような力を持つていた。

ロシヤ語が話せるというだけで私は一

種異った警戒の目でロシヤ兵からは見られるようになった。

又一方ロシヤ語が話せることは通訳を命じられる可能性もあり心配していた。永久にソ連に残されるということも警戒していたがそれが見破られることになった。おまけに将校である身分も発見されることになり、熱のない日などは看護婦や掃除婦など何時迄も話していくこともあり、女医も時々立寄ることもあった。患者に対しては親切だったが女医は技能なしのものでしかなかった。

「重症の患者に対しては日本兵の中で旧衛生兵を選んでその看護に当らせたが、長くその生活に慣れると衛生兵たちもソ連の看護婦と何が愉快なのか笑い興じて、吾々の仲間が今死にかかっているのにとベッドの上で腹の中が煮える思いがする。死生の境をさ迷う仲間の魂を救ってくれるのは一体誰なのか。」病室の硝子窓は二重になっているがその内側の窓硝子は五糎ばかりの氷の層が全面に覆って来た。石炭不足の為かペチカ無し便所は壁から天井に至るまで分厚い雪の花が咲いて、夜には薄青い灯の光にまるで砂金みたいにきらきらまばゆく光るのだ。こんなトイレには二分も居られなかった。寒さが底知れぬ程深刻になるにつれて病院にも漸くあの食糧危機が訪れ始め、粟と高粱の食物に変わり始めた。

ソ連全土を襲ったこの危機は当然俘虜

の吾々にはソ連人の炊事夫の手、掃除婦と移り最後に私たちの手に届く間に量まで殖える筈もない。看護婦、掃除婦は、袋や器などに患者に当てられた食物さえ公然と失敬して持ち帰って行く者さえ出て来た。

回復期にある患者達まで飢えの為回復は遅々としていた。その頃私を悩ましていた高熱も徐々に下って入院後約四十日目、全く平熱に戻った。

「あなたが全快したら病院で手伝って下さい。」女医がベッドの前で話していくようになった。

何れ山の中か炭坑に復帰する身だが、この病院に居残って悲しい人たちの最期を毎日見せられるよりも山に還る方が気楽かも知れないと考えていた。しかしその後から死の山の收容所が私から離れはしない。

ある日のこと、外科病室に勤める菊池という衛生兵が訪ねて「大尉殿、是非この病棟に残って下さい。女医さんから聞きました。あなたの山に帰りたい気持ちも判るが、この病棟の内部を改革しなかつたら悲しい患者達は救われぬ。多くの日本兵のためお願いです」と言う。

純粹な菊池のことばに動かされて居残りの決意を私ははっきりとさせない訳にはいかなかった。

他の衛生兵達の特権を除き、ソ連兵、病院関係の人々の正しい姿に還さねばならぬと私は意を決したのだ。特に入院患者が続々と詰めかけるため、まだ治癒もしない患者が続々退院していく現状、これらの人々は倒れるか死ぬかの二つ、道を山に向って急ぐのだ。よい病院を女医を味方にと心に強く決意した。

病棟も大きく拡張されて病院のような組織になっていったが、共産党の発行する『日本新聞新生命』などがガリ版印刷され、アメリカ資本主義の攻撃が載せられている。単純な日本氏の頭でもその思想を変えるどころか、多くの記事の中から『日本国への送還』という文字だけを拾おうと一生懸命の人々ばかりだった。

看護婦のカーチャーは私が聞きもしないのに「日本兵は一年したら帰国するよ」と話した。それは患者達には悪夢のようなことばだったのだ。

本編つづく

過酷な收容所の生活は終わりが見なく絶望にむかって更に進む。その中で人間とはなにか、生きる希望とはなにか、根本的なことが問われている。

孫ウオツチング ⑨

福田 圭

二〇一六年八月二十九日(月)  
光ちゃん(ペンネーム)は十一月か月になるところである。

六、七か月までの乳児期前半に比べ、一歳半ば頃までの乳児期後半は、比較的安定した成長を示す。

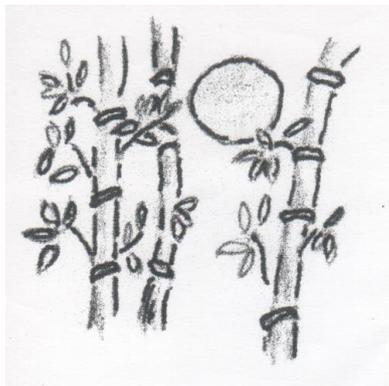
光君も、今回は一月前と比べて大きな変化が見られない「孫ウオツチング」となった。前回同様、いきなり人見知りをされてしまった。

それでも、歯は、上の歯が一本増えて、上下四本ずつの八本になった。前回「つかまり立ち」ができるようになったが、足腰がしっかりしてきて、「つたい歩き」の始まりかけか、少し位置の移動ができかけている。「ずりばい」から「高這い」へ移行し始めている。寝返りも素早くなり、自分で「おすわり」に移行し、かなり長い間座り続けられるようになってきた。パーパー、マーマー、など喃語も豊かである。ただ、何に対しても同じような喃語を発し、区別は未だつかない。三食とも離乳食を食べるようになったそうだ。

ものごとの発展は一本調子に進むものではない。あまり変化の見られない量的な発展の時期と質的に飛躍的な発展を遂げる時期がある。例えば、人は絶えず競争的環境にお

かかっていると息切れしてしまう。踊り場の無い階段が身体と心に圧迫感を与えざるのを考えてみるとよい。時には休むことも必要である。

あまり変化の見られない時期にも、次の飛躍は準備されている。「重たい雪を真つ白にかぶった あの炭鉱(やま)にも この街にも 春を待つ準備をしている 小さい草たちが草たちがいるよ」という歌を学生時代によく歌っていた。インターネットで調べると三池闘争を歌った「仲間」の歌だそう。それを昔「弁証法」の歌と呼んでいたのを思い出した。光君の発達もゆったりと「ウオツチング」していきたいものだ。



## 大人の今昔物語(26)

石川 吾郎



今回は、私が年来疑問に思っていた、さる石塔の由来がわかった物語です。教科書に出ない度は、二／五。

### 阿育王(あいくおう)、后を殺して八万四千の塔を建てること(巻第四ノ三)

今は昔、天竺(インド)に仏が涅槃

に入られて百年ほど後のこと、理想的な大王がおいでになられた。阿育王(あいくおう)と申された。この王は八万四千の後をもつておられた。それにも関わらず王子がおいでになかった。このことをお嘆きになり熱心にご祈禱をされておられると、とりわけご寵愛の深い二番目のお后がご懐妊された。大王は尋常なくお喜びになり、占い師を召して、「このはらんだ子どもは男か女か」とお尋ねになると、占い師「金色に輝く男の御子がお生まれになるでしょう」と占い申し上げる。これを聞き大王は、いやましてこのお后

を大切に扱われた。

\* \*

こうして、王子のご誕生をお待ちになる間に、第一のお后がこのことをお聞きになり、「もしこの王子が生まれるようなことになったら、自分は第二后に負けてしまう。何とかしてその王子を殺してしまおう」と考えた。そこで思いついた。「ちようど孕んだ豚がいる。これが産んだ子どもを、産まれ出る金色の王子と取り替えて、王子を埋めて殺してしまおう。そして『このような豚の子をお産みになりました』と取り出してお見せしよう。」さつそく第二の後の身近かに仕える乳母をよくよく口説いて仲間に入り入れ、出産を待った。月が満ちて後に陣痛が始まり、人に支えられて出産体勢に入ったとき、この乳母が后に諭すに、「お産のときには、いろいろ見ないことが大事です。衣を引き被つておられれば、お産は楽になります」と。后は教えられた通りに衣を引き被つて何も見ないようにしていた。そうするうちに、無事に子どもが産まれてきた。第一の后がご覧になると、じつに金色の光を放つ王子がお生まれになった。予てからの陰謀の通りに、乳母はその王子を他の物と一緒に包み込んで、豚の子と取り替えてしまった。大王には「豚の子をお産みになりました」とご報告させると、大王はこれをお聞きになり「これは、また恥知らずなけしからんことだ」として、出産した后を他国に流してしま

った。第一の后は、ことが上手く運んで大喜びだった。

その後いく月か経ち大王、あるところに行幸され散策をされたことがあった。のんびりと林の中を歩いておられると、一人の女がいた。何か子細ありげな風情だった。呼び寄せてみると、この女は流された第二の后だった。大王はたちまち哀れさと不憫さのあまり、出産のときのことを、改めて問うた。后は「私はつゆとも過ちは犯しておりませぬので、どうかしてこのことを大王さまにお話をいたしたいと思っておりますところ、このように直々にお訊ねいただき、大変うれしゅうございます」と喜んで、事実を申し上げる。大王「わしは罪のない后を流罪にしました。またひかり輝く御子が誕生したのに、他の后どもに殺されてしまったのだ」と、考えを改めて、第二の后を宮殿に召し戻して、前の通りに后に復帰をさせた。そして第二后を除く八万四千の後を、罪のあるものもないものも、怒りにまかせて皆、殺してしまつた。

\* \*

その後大王、つらつら考えるに「后殺しの罪はどれほどか重かるう。地獄に墮ちるのを、どうすれば免れるだろう」と嘆き、近護という羅漢の僧がいたが、大王はその人物にこの悩みを問うた。羅漢「まっこと、この罪は重大で免れることはできません。ただし、お后お一人に

つき一つずつ、計八万四千の塔をお建てなされ。地獄の苦しみを免れるにはこれしかありません。塔を建てる功德は、ただ戯れに石を重ねたり、木を彫つたものだけでも、不思議なものです。ましてや正式ななすり方でこの数の塔をお建てなされば、この罪を免れるのは疑いありません。」

この言葉によって大王、国内に勅令をだし、人間世界のいたるところ八万四千の塔を一斉に建てられた。この中に仏舍利を安置できないことを、大王が嘆いてみると、一人の大臣が言うには「仏は涅槃に入られて後、舍利を分けられたとき、大王さまの父上が本来もられるべき舍利を、難陀竜王が来て、奪い去り、竜宮に安置をしたという経緯があります。早々にこれを奪い返して、この塔に安置されるべきです」

これを聞いて、「わしはもろもろの鬼神や夜叉などを召して、黒金の網でもって海の底をさらえば、定めしこの舍利を奪い返すことができるだろう」と大王は考え、鬼神・夜叉たちを招集して、これを命じて、鬼神に鉄くろがねの網を作らせて、いざ引き揚げさせようとするとき、竜王が恐れおぼして、大王の寝ておられる部屋に参上し、大王を竜宮に案内した。大王と竜王がともに船に乗り、多くの鬼神を引き連れて竜宮に向かう。竜王は大王を迎え「舍利を分けた時、八ヶ国の王が集まり、四衆(ししゅう)が議論を

して、罪を除くために得たという舍利です。大王、もし私のように大切に扱わなければ、きっと罪を得ることになりましよう。私は水晶の塔を建て、特別に供養いたします。」

大王、舍利を得て国に帰還し、八万四千の塔にそれを皆安置された。礼拝をされる時、この仏舍利き光を放つたことだと、語り伝えられている。(終わり)

### 《コメント》

洛東・法然院の境内に巨大な塔があり、そこには「阿育王塔」の文字が彫られています。私は学生時代から、谷崎潤一郎や河上肇、九鬼周造、それに内藤湖南など有名な墓が立ち並ぶ、この法然院の墓地には幾度も足を運んだことがあります。ここに立つ塔の由来がずっと気になったまま、今日まで経つてしまいました。

そして今昔物語のこの物語と出会って、ようやくその由来が分かったのです。古代のインドの殺された后たちの供養の塔が、はるか遠くの日本の京都にまで建つことになるのは、阿育王も夢にも思わなかったことでしょう。彼の地獄行きは、果たして免れたのでしょうか？それにしても、后が八万四千人は多すぎに

もほどがある・・・  
写真は京都洛東・法然院の墓地にある「阿育王塔」。八万三千九百九十九分の一。

## B級サラリーマン渡世譚 (38)

明石 幸次郎

新幹線は東京駅に一分の遅れもなく、定刻通りに着いた。三人は既にドアの近くで待機していたので、ドアが開くといち早くホームに降りた。改札を出ると地下鉄丸の内線の駅に足早で向かった。

明石はただ、二人の後を遅れないように、ついて行った。地下鉄の車内に乗り込むと、大阪の地下鉄車内のざわざわした雰囲気と違い、静寂な雰囲気包まれていた。首都東京の都会的なよそよそしさを感じ、明石は、大阪から箱根を越えて上京して来たのだという感覚を仄々に持った。

ひと駅で東西線に乗り換えて、竹橋駅で降りた。出口が多くあるので、ここでも、二人の後について、3a出口の階段を上がって、外に出た。

広い道路の向こうには皇居が見えた。周りは日本を代表する大手企業のビルが整然と立ち並んでいた。

明石は周りを見渡す余裕もなく、M商事ビルの玄関に、二人に続いて入って行った。N川は何度も訪問したことがあるのか、場慣れた感じで、受付の女性に面談者の部門と名前と時間を東京弁で伝えた。それから、来客用の名札を三個受け取り、エレベーターに乗り込み八階のボタンを押した。

エレベーターの中でN川は、M居と明

石に来客用の名札を渡した。八階でエレベーターが止まると、M居、N川、明石の順に降りて、K口等のいるフロアーに向うと、受付から連絡が入っていたのか、K口が廊下から、こちらに向って笑いながらやって来た。

「おはようございます。M居さん、N川さん、朝早くからご苦労様です。お待ちしていました。こちらにどうぞ」と、応接室に案内された。

三人掛けのソファにN居が真ん中に座り、右に明石、左にN川が座った。M居が「K口さん、今度の人事異動で輸出本部が八人も増員になり、大所帯になってしまったよ。その分、売り上げを増やさないといけないから、大変やわ。それで、紹介するわ。増員で我々の課に来た、明石や。俺がやってた韓国を担当させる。それは、昨日お宅のI田さんに、話をしている。ところで、打ち合わせには、どなたが出てこられるの?」と言っていると、ノックされて、ドアを開けて、I川課長、O田が愛想笑いをしながら入って来た。

I川課長は大手商社マンらしく、スーツを着こなし、入って来るや否や「M居さん、早くから、ご苦労様ですね。あつ！工場から転勤されて、韓国を担当されると言われた人は、この方ですか?」と明石の方に向って、にっこりと話しかけた。

M居は「明石、挨拶しろ」と命令調に明石に向って指示したので、明石は少しムカツとしたが「初めまして、明石と申

します。S工場に居ましたので、営業は初めての経験で、況して貿易部門はやったことがありますので、ご指導の程、宜しくお願いします」と、型通りの挨拶をした。

I川課長は「明石さんが、工場のご出身であれば、M居さんが苦勞されたような、短期の納期対応も、工場に顔が効くことでスムーズに行くのでしょうね。はっはっは」とM居と明石の立場を考慮した応対を、笑いながら行った。

M居は「ウチの工場は難しいですよ。なあ、明石。それで、今日は、夕方から、明石と、もう一人、T工場から二年目のJ野と言うのが来たので、部の歓迎会をやります。昼から直ぐに帰らないといけません。まあ、早速バン格拉援助の件の話をやりましょか？」と切り出して「おい、N川、君の方から我々の希望価格と現地対応をどうするかを、説明しなさい」と行き成り、今日の本題に入る様、命令口調で指示した。

N川は、少し不快感を顔に表しながら「K口さんと私が電話で話し合っても結論が出なく、時間を浪費するだけです。で、本日出向きまして、弊社の、貴社に対する、希望とお願いを申し上げに参りました」と涼しい顔で切り出した。

K口は顔色を変えて「N川さん、時間の浪費とは、言い過ぎじゃないですか？私が電話で貴方とお話をしたのは、弊社としての考えを申し上げた訳で、私の個

人的な見解を述べた訳ではありません。電話が長くなつたのは、貴社としての、お考えを何度もお聞きしたのに、ああや、こうやと言われるだけで結論らしき事を言われなかつたからです。時間を浪費させたのは、N川さんの方ですよ」とK口は、上司が同席している場でI川に、今までの電話での話し合いが時間の無駄であった様なことを言われたことで、商社マンとしてのプライドを痛く傷つけられたのか、N川に激しく反論した。

O田は「御社と我社は専用回線が繋がっている、電話代は一般と比べれば、遥かに安い、I川さんとK口の人件費は高いよね。二人共、良く似た者同士だから、ぶつかっちゃうんだね。しかし、御社とウチは一心同体で味方同士で、敵はN商事グループとM菱商事グループです。このコンペジターに打ち勝つための方策をこの席で議論して、1時間半位で纏めましょう。ねえ、N川さん、K口と、お互い無駄な？時間を浪費し合ったからこそ、今日、この席に至ったと考えて見て下さい。そうだ、K口君、女性にコーヒーを持って来るように連絡を頼みます」と言つて、二人の険悪になりかけた雰囲気やを和らげた。

N川は、話をそらされたが、本論に戻り、「それで、弊社の最終ポトムプライスは、FOB大阪港八二五〇〇円×五〇〇〇台、プラス、サービスパーツ本機の一〇パーセント。トータルプライスは、四

億五三七五万円です。現地に出向くのは、課長のA杉が行きます。何としても落札したいので、A杉自らが行くと言っています。出張のタイムリングと日数は、御社にお任せします」と滞りなく話した。

M居は「N川、付帯条件と言うか、追加的条件が抜けているやないか？」と残りの条件を話すように促した。N川は頭を掻きながら「ええっと、受注単価が八二五〇〇円を切った場合は、その分、御社のコミッションから、引かせて貰います。プラスになれば、その分の五〇パーセントは、弊社と折半して、御社のコミッションに上乘せさせて頂きます。これが弊社の最終オツファーです。」と、言い残した条件を提示して、向い側に座っている、三人の反応を待った。

### 編集後記

残暑お見舞い申し上げます。

山好きのTさんからお葉書を頂きました。

主人・赤牛、針ノ木岳、祖母谷く白馬。

私・木曾駒（ロープウェイ利用して）

つばくろ岳

梅雨が長引いたり、天候に悩まされた夏。

毎日、暑い！ことです。今、PM八時

気温、室内で三十四度。信じられませう

ん。

芥川だより、毎月ありがとうございます。

少し難解なので、何日にも分けて読んでいます。ニュースの側面、そして八月はシベリア記に目がいきます。ドイツ旅も面白く、他も読みごたえあり。カンボジアもびっくりですね。丁度来年二月にアンコールワットを訪ねる予定なので身近に感じました。

暑さも、まだまだ。お身体お大事に！

(嘉)

皆様からのお便りをお待ちしております。



赤いリンゴ

戦後七十一年、自分の年令を振り返って「まあ、元気で生きてこられたんやなア。(赤いリンゴにくちびるよせて)庶民が手に出来ない高価な果実だったリンゴ。

戦後の焼け野原に、ヒット曲一号が生まれた。並木路子さんの歌唱で知られる(リンゴの唄)である。

実弟が小学校六年生ぐらいだったと思う。村の公会堂で、何の楽しみもない人達を集めて、息子を良人を赤紙一枚で戦地へ送った人たちをなぐさめる気持ちだったのか。

戦闘帽を頭にのせて「赤いリンゴにくちびるよせて…」調子よく唄ったのだ。みんなよろこんで、もう一回唱って…。誰か踊って、といわれて、二、三人友達と盆踊りを。まあ、オッチョコチョイの姉弟なのだろう。

あとで親に、「調子にのるな」とおこられた。けれども、よい思い出。実家に帰れば、その話を弟と夢中でやってしまう。あの当時は、物はなかつたけれど、みんな人情味があったものな…。

働き手をなくして、ともに貧しく、食糧難が暗い影を引きづっていたけれど。  
先日の紙上に、海老名香葉子さんの「戦後は死ぬか生きるか、ひとりば

つちの戦いだつた」と、その怖さを語っておられた。もう一度、唱ってみるか。リンゴの唄を

どっちもどっち

気持ちよく晴れた朝

さあー出発。安べーぼつぼつ行くのか。AM五・三〇分。よつこらシヨ、と立ち上がった時

「タクシーの電話番号教えてー」という声。どうしたん…聞くまもなく番号の紙をひったくって飛んで出る。

「あかん、掛けられへん。使われてないといってるワ」その動作をみて、落ち着け変事が起きたから自分を失ってるんや。この番号で掛けてみたらと、差し出す。キーを押している手がふるえている。又、あかん。なんでやねん、市外局番からという声を尻目にして、もう姿はなし。

道路際に二人の姿あり、なんでやねん、救急車をよんだのに十分もたった。イライラ、声もあれている。病人さん細ねぎの首みたいにやせかけている。大丈夫かいな、こんな暑い場所にいる、やばい、いらぬ口をはさむといけない。とかく人間が変わってるんやもの。

遠くから見るだけにしよう。大きなお世話だといひそうな気配。やと来た。救急車が、ピーポ、ピー

ポー。二人が乗り込む姿を見て、私も出発。

建ち並ぶマンション風影、こんな立派なマンションにどんな人たちが住んでいるのだろうか…。ふと、やはり救急車が気になる。まだ、元のままの位置でとまっている。何してるのやろ。もう十分ぐらいたつてるのに。

あまり他人事に首をつつこまないこと。頼まれた事だけすればいいのだが、ついついお人よし気分になつてしまう。家路につく。あれ、ここにあつた朝刊がない。玄関の戸が開いている。帰ってきたのかなアーと、ソーツとのぞいてみたら、キョトンとして、洗濯ものをさわっている。

「やつと開放されたワ、点滴が一時間。手術してくれた主治医が来て「心配はいらぬ。暑いので充分注意して食べ物にも。こういった状態は、まだ一週間はつづくから、立ちくらみ…、体温の変化。イライラしないで家でゆっくり休んで下さい」と言われた。病人さんは、フトンの中へもぐり込んだまま顔も見せない。なんやねん。

私は、二人の口から、何らかのコトバを求めていたのかも。今の自分の気持ちが情けなくみじめであった。どっちも、どっちも、私にあってはまる。

風影

考えるのをやめれば、なにも怖くないただ無になることが出来る自分という存在はどこまでも天地にただ一人

体の半分はもうあの世にいつて過去も未来も まあいいかとあきらめることを知るようになる夢中になれるのが見つければ人は生きていて救われる

俳句

土田 裕

「くわばら」と

言ひしは昔稲光

稲妻や

山河俄かに迫りきし

父母の

亡き里遠し盆の月

中東の争ひ絶えず

柘榴爆ず

もう迷うことなく生きむ

鰯雲